



Title	中観派の"帰謬の反転"をめぐるケードップの所説
Author(s)	小林, 守
Citation	インド哲学仏教学論集, 3, 1-63
Issue Date	2016-03-31
DOI	10.14943/hjipbh.3.1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76462
Type	bulletin (article)
File Information	hjipbh_3_1.pdf



[Instructions for use](#)

中観派の“帰謬の反転”をめぐるケードアップの所説

小林 守

はじめに

表題にある「中観派の“帰謬の反転”」は、チベット語 “dbu ma thal bzlog” の和訳である。チベット語 “thal bzlog” に対応する梵語としてプラマーナ論で用いられる “prasaṅgaviparyaya” をあげることができるが、しかし本稿で扱う “dbu ma thal bzlog” という語はチベット仏教においてより限定された意味に用いられる。周知のようにインド中観派の歴史においてナーガールジュナの『中論』にブッダパーリタ（仏護）が注釈を著し、それをバーヴィヴェーカ（清弁）が批判し、さらにその清弁説をチャンドラキールティ（月称）が再批判したが、特に『中論』1.1 に説かれる“自不生”に関する仏護注への清弁の批判（蔵訳）に “thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir skabs kyi don las bzlog pas¹（帰謬文であるから問題となっている意味を反転させることにより）”とあり、その清弁説への月称の再批判（蔵訳）に “thal bar 'gyur ba bzlog pa'i don dang yang pha rol po nyid 'brel（帰謬を反転させた意味とも対論者だけが結び付く）”等とあるように、“dbu ma thal bzlog”とは、そうした中観派（dbu ma）の特に“自不生”に関わる帰謬の反転（thal bzlog）を意味する²。

この“帰謬の反転”をめぐるインドの『中論』注釈家たちの一連の論争は、チベット仏教ゲルク派の中観論書において好んで取り上げられたトピックの一つである。ゲルク派における“dbu ma thal bzlog”の議論の始まりは、言うまでもなくツォンカパ（Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357-1419）の所説、特に彼の『中論注（*rTsa she ṭik chen/rTsa ṭik*）』の所説である。ツォンカパ『中論注』は“帰謬の反転”の問題を慧眼をもってシャープにそして簡潔

1. このチベット文は、清弁『般若灯論』の蔵訳ではなくて、月称『明句論』所引の清弁説の蔵訳にあるかたち。Cf. 第I節注 5.

2. 南インドのセラ寺から出版されたセラ・ジェツンパ『中観概論』の洋装本 *rJe btsun dBu spyi don* (S²) 目次には “dbu ma thal bzlog bdag skye 'gog pa'i rigs pa（中観派の“帰謬の反転”：自よりの生起を否定する正理）”とある。

に論じたが(タシルンポ版で約 3.5 フォリオ)、その後ツォンカパの二大弟子の一人ケードゥプ(mKhas grub dGe legs dpal bzang, 1385-1438)が中観の大作『千葉大論(sTong thun chen mo/TTChen)』において、ツォンカパ説を継承しつつ異説批判などもまじえて、より詳しい論述を行い(ラサ版で約 8 フォリオ)、これにより“帰謬の反転”に関するゲルク派説の基礎が確立されたといえる。その後、セラ・ジェツンパ(Se ra rJe btsun pa Chos kyi rgyal mtshan, 1469-1546)、パンチェン・ソナムタクパ(Paṇ chen bSod nams grags pa, 1478-1554)、テンパタルギュー(mKhas grub dGe 'dun bsTan pa dar rgyas, 1493-1568)、ジャムヤンシェパ('Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje Ngag dbang brtson 'grus, 1648-1722)などのゲルク派各学堂の教科書(yig cha)を作成した論師たちが、それぞれの中観論書において、ツォンカパ説／ケードゥプ説を踏まえて“帰謬の反転”を詳述した³。

さて、本稿では上の諸論師のうちケードゥプの『千葉大論(TTChen)』“帰謬の反転”を取り上げることにした。それは、ゲルク派説の根本は無論ツォンカパ説であるが、ツォンカパ『中論注』の所説は TTChen の所説によってほぼカヴァーされ、しかも TTChen にはツォンカパ『中論注』にはみられない興味深い議論が展開されているからであり、そして TTChen にみられるケードゥプ説はその後の諸論師にも影響を与えたゲルク派説の基本とも言えるからである。

ところで、TTChen 全体の翻訳はすでに Cabezon[1992]の英訳と、ツルティム/藤仲[2001][2003]の和訳が得られる。筆者も小林[2014]の準備のために両訳を参照して得た利益は大きい。しかし両訳によってはケードゥプの真意を捉えにくい箇所も認められる。そもそも“帰謬の反転”のような議論を翻訳する場合、「所証」「証相」などと訳出するときにそれぞれの文脈においてそれらが具体的に何を意味しているかを明確にしないと議論についていけないが、その点に注意する必要があるだろう。特に、チベット文では動詞の主語を明示しないケースが少なくないが、動詞の主語を自覚的に把握し

3. Wangchen[2001:183-200]は“帰謬の反転”の項目のもとに、ツォンカパ説／ケードゥプ説のほかに、上の4論師の所説、及びダライラマ5世(rGyal ba lnga pa Blo bzang rgya mtsho, 1617-1682)の所説を摘記している。ほかに sGom sde Nam mkha' rgyal mtshan: *Thal bzlog gi dka' ba'i gnas gtan la 'bebs pa* が重要だが、今回披見し得なかった。なおゲルク派各学堂の教学については、西沢[2011:546ff.]参照。

てテキストを読まないで文脈の意味を理解しそこなうことにもなりかねない。その点にも十分に注意する必要があるだろう。本稿では“帰謬の反転”に関するケードゥブ説のより精確な理解のために、上の点に注意を払いつつ TTChen 当該箇所を翻訳を試みることにしたい。

なお TTChen 蔵文テキストに関して、Cabezón[1992]の英訳は、New Delhi (1972)から出版されたラサ版 (H) に基づく。ツルティム/藤仲[2001][2003]の和訳の底本は、ツルティム氏入手のラサ版 (H²) で、タシルンポ版 (T) を校合している。しかしクンブム版 (K) は、その両版とは異なったより良い読みを示すケースがある。諸版を校合した蔵文テキストは第Ⅲ節に掲載することにした。

I TTChen “帰謬の反転”の梗概と特徴的な所説

TTChen “帰謬の反転”の本文に科段は設けられていないが、論述内容を理解しやすくするために次のように分科した。

- 0 仏護/清弁の所説：『明句論』における引用 (H169a5; K179b5; S309,6; T119a2)
- 1 “ある人”の清弁/月称理解とそれへの批判 (H169b3; K180a3; S309,20; T119a5)
- 2 清弁説の解説 (H170b4; K181a4; S311,19; T120a2)
- 2.1 証相と所証の反転のさせ方 (H171a1; K181b2; S312,9; T120a5)
- 2.2 定説との矛盾 (H172b3; K183a4; S315,8; T121a7)
- 3 月称説の解説 (H173b1; K184a2; S316,18; T122a1)
- 3.1 自立論証の不承認
- 3.2 他者に極成の推理 (H173b4; K184a5; S317,7; T122a4)
- 3.3 帰謬を反転させた意味は中観派に結び付かない (H174a6; K184b6; S318,7; T122b2)
- 3.3.1 清弁の考え方 (H174b6; K185a6; S319,4; T122b7)
- 3.3.2 月称の考え方 (H175b1; K186a1; S320,5; T123a6)
- 3.3.3 清弁流と月称流の相違：“再生起”をめぐる (H176a5; K186b5; S321,14; T123b7)
- 3.3.4 異説(ギェンサンワ説)批判 (H176b4; K187a4; S322,7; T124a3)
- 3.3.5 帰謬の目的 (H177a3-b3; K187b3-188a2; S323,2-19; T124b1-5)

TTChen “帰謬の反転”に述べられるケードゥブ説は基本的にツォンカパ『中論注』の所説を継承するものである。しかし上のうち《1 “ある人”の清

弁／月称理解とそれへの批判》と《3.3.4 異説(ギェンサンワ説)批判》は、ツォンカパ『中論注』にはみられない議論であり、又《2.1 証相と所証の反転のさせ方》《2.2 定説との矛盾》にはツォンカパ説とは異なった論述がみられる。ここで、翻訳研究の結果確認された TTChen の特徴的な所説として3点を予め解説しておく。

〔1〕清弁のいう“反転 (bzlog pa)”について

仏護注：「諸事物は、自己の自体より生じることがない。それらの生起が無意味となるから、そして生起が無窮となるから」に対して、清弁は『般若灯論』において、「それは正しくない。なぜなら [それは] …… [他の論者の非難の] 余地のある文であるから。すなわち、問題となっている意味を反転させることにより、所証とその属性を反転させた意味が顕わとなるから、“諸事物は他より生じる”ことになる、“生起が有効 (有意味) である”ことになる、そして“生起が有窮である”ことになるゆえ、定説と矛盾するだろう」と批判する⁴。

『般若灯論』下線部の文言「余地のある文であるから (glags yod pa'i tshig yin pa'i phyir/ *sāvakāśavākyatvāc ca)」は、月称『明句論』所引の清弁説では「帰謬の文であるから (thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir/prasaṅgavākyatvāc ca)」となっている⁵。チベットには、それらの『般若灯論』の蔵訳と『明句論』

4. PP,D49a5-b1, P58b7-59a2: 'di las gzhan ni dngos po rnams bdag gi bdag nyid las skye ba med de/ de dag gi skye ba don med pa nyid du 'gyur ba'i phyir dang/ skye ba thug pa med par 'gyur ba'i phyir ro zhes rnam par bshad par byed do// de ni rigs pa ma yin te/ ① gtan tshigs dang dpe ma brjod pa'i phyir dang/ ② gzhan gyis smras pa'i nyes pa ma bsal ba'i phyir dang/ ③ glags yod pa'i tshig yin pa'i phyir te/ skabs kyi don las bzlog pas bsgrub par bya ba dang/ de'i chos bzlog pa'i don mngon pas dngos po rnams gzhan las skye bar 'gyur ba dang/ skye ba 'bras bu dang bcas pa nyid du 'gyur ba dang/ skye ba thug pa yod par 'gyur ba'i phyir mdzad pa'i mtha' dang 'gal bar 'gyur ro// 下線部については、次を参照。PPTk,D(Wa)74a 2-3, P(Wa)86a8: de ni rgol ba gzhan gyi klan ka'i glags yod pa'i tshig yin pa'i phyir yang rigs pa ma yin no// 又『明句論』所引の仏護説と清弁説の梵文は、第II節注 1)、2) 参照。

5. Cf. rTsa tīk, S52, 12-15, T31a4-5: Tshig gsal las thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir zhes bsgyur yang Shes rab sgron ma las glags yod pa'i tshig yin pa'i yang phyir te/ zhes bsgyur ba ltar 'Grel bshad kyis kyang bshad la de yi phyir yang mi rigs zhes mi rigs pa'i rgyu mtshan du bshad do// 上の『般若灯論』『明句論』の蔵訳斜体部の原梵語については、第II節注 17) 参照。

なお、単に今問題の文言の蔵訳語の違いばかりでなく、『般若灯論』そのものの蔵訳と

の蔵訳の2つは翻訳の仕方が異なるだけで意味は同じとする見方もあるが⁶、しかしツォンカパは、恐らくその2つの蔵訳の意味を区別した上で、清弁説を解説する際に『般若灯論』蔵訳にある“glags yod pa'i tshig (余地のある文)”を採って、このように言う。

どのように[他の論者の非難の]余地があることになるのか[という]なら、問題となっている意味つまりその論証式を反転させることによってである。問題となっている意味を反転させることにより[非難の]余地のある文となる仕方は、「事物は、自己の自体より生じることがない」という所証を反転させた意味が顕わとなることにより「諸事物は、他より生じる」[という所証]、そして[その所証を]論証する属性つまり証相を反転させた意味が顕わとなることにより「生起が有意味・有窮である」[という証相]となるか

『明句論』所引の清弁説の蔵訳では構文が異なっている点にも注意すべきだろう。前注4に示した『般若灯論』蔵訳では仏護注が不合理であることの理由として3点①②③を並列的に挙げ、そして理由③を具体的に説明するのが“skabs kyi don las bzlog pas”以下である。Cf.PPTk,D(Wa)73b6-74a4, P(Wa)86a3-b2.

一方『明句論』所引の清弁説の蔵訳“de ni rigs pa ma yin te/ ①gtan tshigs dang dpe ma brjod pa'i phyir dang/ ②gzhan gyis smras pa'i nyes pa ma bsal ba'i phyir ro// <3> thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir skabs kyi don las bzlog pas bsgrub par bya ba dang/ de'i chos bzlog pa'i don mngon pas dngos po rnams gzhan las skye bar 'gyur ba dang/……”(cited in TTChen,H169b1-2)では、仏護注が不合理であることの理由として2点①②をあげた後、<3>の下線部“thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir (帰謬の文であるから)”は、直接的には仏護注の不合理性の理由ではなくて、その直後の“skabs kyi don las bzlog pas (問題となっている意味を反転させることにより)”の理由のようにも読める。以下に示すツォンカパ説とケードゥブ説の相違も、一つには、『般若灯論』そのものの蔵訳と『明句論』所引清弁説の蔵訳のどちらに重点をおくかに起因するように思われる。Cf.Tillemans [1992:320-321].

6. セラ・ジェツンパ『中観概論 (rJe btsun dBu spyi don)』は、本節[3]で取り上げるギェンサンワ説への一連の批判の中で、こう述べている。rJe btsun dBu spyi don, S¹99a7-b1, S²233,4-9: khyed kyi (⇒kyis ?) thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir/ zhes pa sgrub byed 'phen pa'i thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir/ zhes pa'i don du 'chad mi rigs par thal/ Tshig gsal las/ thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir zhes pa dang/ Shes rab sgron mar glags yod pa'i tshig yin pa'i phyir/ zhes pa gnyis 'gyur khyad ma gtogs don geig pa'i phyir/ ; 和訳: 「あなた(ギェンサンワ)が[『明句論』にある]「帰謬の文であるから」というのを、「論証を投げかける帰謬の文であるから」という意味に説明するのは不合理であることになる。なぜなら、『明句論』[蔵訳]に“thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir (帰謬の文であるから)”とあり、『般若灯論』[蔵訳]に“glags yod pa'i tshig yin pa'i phyir (余地のある文であるから)”とある、その2つは、翻訳の相違を除くと意味は同一であるから。」Cf.Tillemans[1992:320,n.14].

ら、自己の定説と矛盾することになるという過失がある。以上のように〔清弁は〕言う⁷。

これによると、清弁は、仏護注の文言そのものを論証式 (sbyor ba/prayoga: [宗] 諸事物は、自より生じることがない。〔因〕生起が無意味・無窮のゆえ。) に見立てた上で、それを反転させる (bzlog pa/viparyaya) と論じていることになる。その場合にその論証式を反転させる理由が問題となるが、まず証相の反転の理由について、ツォンカパは、こう説明する—上の仏護注の文言そのものからなる論証式の主題所属性「諸事物は、生起が無意味・無窮である」は、まず成立すべくもない；又“自よりの生起があるなら生起が無意味・無窮である”を証相として立てるなら、証相の主題所属性が成立したとしても、この場合は“自よりの不生”を論証する論証式を構成するのが無意味となる；よって、仏護注に実際に述べられた通りに論証式を構成するのは妥当でない；それゆえ、主題所属性を満たし、しかも意味のある論証式を構成するためには、仏護注に実際にある証相“生起の無意味性・無窮性”を反転させて“生起の有意義性・有窮性”が証相となる、と⁸。

又所証の反転に関して、ツォンカパはこう説明する—上のように仏護注に実際に述べられている証相“生起の無意味性・無窮性”を反転させて“生起の有意義性・有窮性”という肯定的な属性を証相としたなら、実際に述べられている主張命題「諸事物は、自より生じることがない」も反転させなければならない；その場合、証相の反転のケースと同じように“自より生じることがない”を反転させて“自より生じる”を所証とすることはできない；よって、所証“自よりの不生”は本来“自よりの生起の排除のみ (bdag skyen rnam

7. *rTsa t̃ik*, S52, 15-20, T31a5-b1: glags yod par ji ltar 'gyur na skabs kyi don sbyor ba de las bzlog pas 'gyur ro// skabs kyi don las bzlog pas glags yod pa'i tshig tu 'gyur tshul ni/ dngos po bdag gi bdag nyid las skyen ba med de zhes pa'i bsgrub par bya ba bzlog pa'i don mngon pas dngos po rnams gzhan las skyen ba dang sgrub pa'i chos rtags bzlog pa'i don mngon pas skyen ba don bcas dang thug bcas su 'gyur bas rang gi grub mtha' dang 'gal bar 'gyur ba'i skyon yod ces zer ro// Cf. Samten/Garfield [2006: 62].

8. *rTsa t̃ik*, S52, 20-53, 3, T31b1-2: don dang thug med kyang rtags min la bdag skyen yod na don dang thug med kyang rtags su mi rung ste de rtsod gzhi'i steng du grub na bsgrub bya grub dgos pa'i phyir ro// des na bzlog don gnyis rtags so// Cf. Samten/Garfield [2006: 62]. ケードゥプは《2.1 証相と所証の反転のさせ方：証相の反転のさせ方》(TTChen, H171a1-4)において、はじめにこのツォンカパ説を解説する。ここでもケードゥプによる解説を参考にした。

par bcad tsam)”であるが、それを反転させて“自よりの生起の排除のみではない (bdag skye rnam par bcad tsam min pa)”つまり“自よりの生起の排除のみの絶対否定 (med dgag) ではない相対否定 (ma yin dgag)”が所証となる；そこから“他よりの生起”が所証となる、と⁹。

以上のように、ツォンカパは仏護注の文言そのものを論証式に見立てるとき、まず「諸事物は、生起が無意味・無窮である」という主題所属性が成立しないことから、その証相の反転、そしてそれに連動して所証の反転を論じていくが、その場合の“反転（ひっくりかえす）”は「否定」の意味であって、帰謬の「換質换位」の意味では決してない。それは、仏護注の文言を“帰謬の文”ではなくて“余地のある文”と捉える清弁『般若灯論』そのものの記述に、恐らく忠実に、従ったからだろう。上のツォンカパ説を整理するなら、こうなる。

〔宗〕諸事物は、自より生じることがない。

（所証の反転⇒所証 “自よりの生起の排除のみではない” ⇒ “他より生じる”）

〔因〕生起が無意味・無窮のゆえ。

（証相の反転⇒証相 “生起が有意味・有窮のゆえ”）

所証と証相の反転（否定）の結果、“他よりの生起”“生起の有意味性・有窮性”という、他者の非難を招く余地がある (glags yod pa) ことになる¹⁰。

一方、ケードゥブは、まず《2.1 証相と所証の反転のさせ方》において、上のツォンカパ『中論注』に従った“証相の反転”を説明した後に、仏護注（『明句論』蔵訳所引形）：“de dag gi skye ba don med pa nyid du 'gyur ba'i phyir dang/ shin tu thal bar 'gyur ba'i phyir ro (BPV: skye ba thug pa med par 'gyur ba'i

9. *rTsa tīk*, S53,3-9, T31b2-4 : dngos zin gyi rtags bzlog dgos na dngos zin gyi dam bca' yang bzlog dgos te mtshungs pa'i phyir ro// de la rtags bzlog pa ltar byar med pas bdag skye rnam par bcad tsam min pa bzlog pa'i don no// 'di thal chos kyi rtags bzlog pa min te bsgrub par bya ba bzlog pas zhes bshad pa'i phyir dang bdag skye med pa rtags su ma smras pa'i phyir ro// de yi tshe skye ba don dang thug bcas yin pa'i phyir dngos po rnams bdag skye rnam par bcad pa tsam min no zhes pas gzhan las skye bar 'gyur ro// Cf. Samten/Garfield[2006:63]. ケードゥブはこれらのツォンカパ『中論注』の記述を《2.1 証相と所証の反転のさせ方：所証の反転のさせ方》(TTChen, H171b1-2, H172a3-5) に引用解説する。ここでもそのケードゥブの説明を参考にした。

10. Cf. PPTk, D(Wa)74b4-5, P(Wa)87a6-8 : dngos po rnams gzhan las skye ba zhes bya ba'i glags yod par 'gyur ba dang/.....skye ba 'bras bu dang bcas pa nyid ces bya ba'i glags yod par 'gyur ba dang/.....skye ba thug pa yod pa zhes bya ba'i glags yod par 'gyur ba'i phyir ro//

phyir ro) //” をめぐって、このように言う。

反転させた意味を証相として〔仏護自身が〕認めているのが顕わとなるあり方とは、〔仏護注蔵訳にある〕「なるから(’gyur ba’i phyir)」という前後2つの語句が反転させた〔意味〕を投げかける語句であるのが顕わとなる。どのように顕わとなるのか〔という〕なら、「そうであるなら(自より生じるなら)それらの生起が無意味となる」〔という語句〕から「有意味であるから」、そして「そうであるなら(自より生じるなら)それらの生起が無窮となる」〔という語句〕から「有窮であるから」というあり方によってである。以上のごとくであるなら、「自より生じることがない」と仏護自身が初めに述べたその主張命題の能証として、「生起が無意味・無窮である」と実際にことば通りに述べていること、単にそれのみを、証相として立てるのではなくて、実際にことば通りに述べていないが、〔仏護注にある〕「なるから(’gyur ba’i phyir)」という語句の能力により間接的に投げかけられているのが顕わとなる反転させた意味“生起の有意味性・有窮性”を証相として立てるのが仏護自身の主張であるのは明らかである、と。〔これが清弁による仏護批判の〕意味である¹¹。

さらにケードゥプは《3.3.1 清弁の考え方》において次のように言う。

それも、〔仏護注蔵訳にある〕「それらの生起が無意味となる(de dag gi skye ba don med par ’gyur)」という語句によって、直接的には、「生起が無意味であるという不合理なことになる(skye ba don med par thal ba)」と帰謬を投げかけ、そして「無窮となる(thug pa med par ’gyur)」という〔語句〕によっても、「無窮であるという不合理なことになる(thug pa med par thal ba)」と帰謬が投げかけられている¹²。

ここにあるように、ケードゥプは、上に示した仏護注蔵訳下線部の2つの「～なる(’gyur ba)」を、「～という不合理なことになる(thal ba)」と読み込み、仏護注において一見、論証式の証相のように見える「生起が無意味となるから」「過度の広がりとなるから(生起が無窮となるから)」を、帰謬の不合理な帰結(thal chos)と捉える。よって、ケードゥプの清弁解釈によると、清弁は、仏護注の実際の文言そのものには述べられていないが仏護注の文言に基づいて、

11. TTChen, H171a4-b1.

12. TTChen, H175a2-3. 他に TTChen, H176a6-b2 にも同趣旨の説明がみられる。

〈B1〉〔宗〕諸事物—主題—は、生じることが無意味という不合理なことになる。

〔因〕自より生じるから。

〈B2〉〔宗〕それ（諸事物）—主題—は、無窮に生じるという不合理なことになる。

〔因〕自より生じるから¹³。

という帰謬を構成していたことになる。そしてこれらの帰謬を反転させると、

〔宗〕諸事物—主題—は、自より生じることがない。

〔因〕生じることが有意味・有窮であるから。

という論証が導かれることになる。

上で述べたように、『般若灯論』において清弁が仏護注の文言を“余地のある文（*sāvakāśavākya）”と理解したのに対して、月称『明句論』に引用される清弁説では、清弁はそれを“帰謬の文（prasaṅgavākya）”と評価したことになる。上のケードゥプ説は、恐らくその月称による清弁説の捉え方に依っているのだろう。つまり、ケードゥプによると、仏護注の「なるから（'gyur ba'i phyir）」という語句によって、直接的には（dngos su）、上の帰謬〈B1〉〈B2〉の不合理な帰結“生起の無意味性・無窮性”が投げかけられており、そしてそれによって間接的には（shugs la）、その帰謬の不合理な帰結の反転させた意味“生起の有意味性・有窮性”が論証の証相として投げかけられている、と。よってこの場合、清弁のいう“反転”は帰謬の「換質换位」を意味する。“'gyur ba'i phyir”をめぐる論述においてケードゥプは自説を強く打ち出しているように思われる¹⁴。

〔2〕観誓注の扱いについて

上の〔1〕に示した清弁による仏護説批判のうち「定説との矛盾」に関連して、ツォンカパ／ケードゥプの両者は、Avalokitavrata（観誓）の『般若灯論・釈疏（PPTīk、観誓注）』から次の一節を引用する。

〔仏護説は〕論師（ナーガールジュナ）の聖教において“他よりの生起”と“生起の有意味性・有窮性”をお認めにならない定説と矛盾する¹⁵。

13. TTChen, H175a5-6.

14. 尤もツォンカパ『中論注』に、「清弁は、仏護は“生起一般が無意味・無窮になる”という具合に帰謬を投げかけたと把握した上で」と一言されてもいるから、ケードゥプ流の清弁理解の仕方がツォンカパに全く存在しなかったのでもないだろう。Cf. 後注 26.

15. *rTsa tīk*, S53, 11-12, T31b5: 'grel bshad kyis slob dpon gyi lung las gzhan skye dang

ケードゥプの引用する観誓注の文言は、観誓注そのものではなくて、ツォンカパ『中論注』所引のものに殆ど逐語的に一致するため、後者から孫引きしたものに違いないが、同じ観誓注の所説を引用しながら、その扱いがツォンカパとケードゥプの間で異なるのが興味深い。実際パンチェン・ソナムタクパは『中観概論 (*Paṅ dBu spyi don*)』のなかで上の観誓注の一節を引用した後に、

これ（観誓注の一節）に関して「ツォンカパは」『中論注』において「観誓の」主張を繰り返すのみでその他に否定は行っていないとしても、
「ケードゥプは」『千葉大論 (TTChen)』において、「それ（観誓注の所説）は正しくない。なぜなら清弁自身は“諸事物は他より生じる”と承認し、それこそが聖者（ナーガールジュナ）のご主張でもあると説明するから」と、否定なさっている¹⁶。

と述べて、ツォンカパ／ケードゥプ間の観誓注の扱いの相違に注意を促している。

ソナムタクパの言うとおりに、まずツォンカパ『中論注』(*rTsa tīk*, S53,4-12, T31b2-5)では、“自よりの不生”を反転させた意味が“自よりの生起の排除のみではない”となり、その絶対否定ではない相対否定により“他よりの生起”が間接的に導かれ、それがナーガールジュナの定説“自よりの生起の排除のみ”と矛盾すると論じ、そのことの教証として上の観誓注を引用するだけで、他の余計なコメントは一切しない。つまりツォンカパにとって、問題の観誓注の所説は、単純に自説を支えるプラスの意味の典拠に他ならない。

一方、TTChen の以下のケードゥプの所論では一見、観誓注の所説は批判対象となっているようにもみえる。蔵文テキストと拙訳は、こうである。

*Shes rab sgron ma'i 'grel bshad kyis/ slob dpon gyi lung las gzhan skye dang
skye ba don dang thug bcas mi bzhed pa'i grub pa'i mtha' dang 'gal lo// zhes*

skye ba dong dang thug bcas mi bzhed pa'i grub mtha' dang 'gal zhes 'chad do//; TTChen, H173a3. Cf. PPTīk, D(Wa)74b6-7, P(Wa)87a8-b1 : slob dpon gyi lung las/ dngos po rnams gzhan las skye bar mi bzhed pa dang/ skye ba 'bras bu dang bcas par mi bzhed pa dang/ skye ba thug pa yod par mi bzhed pa'i grub pa'i mtha' dang 'gal bar 'gyur ro//

16. *Paṅ dBu spyi don*, 46b4-5 : 'di la *rTsa she'i rnam bshad* du 'dod pa bskyar ba tsam ma gtogs dgag pa ma mdzad na'ang/ *sTong thun chen mor de mi rigs te/ Legs ldan 'byed rang nyid dngos po rnams gzhan skyer khas len zhing/ de nyid 'phags pa'i yang bzhed par 'chad pa'i phyir/ zhes 'gog par mdzad/*

'chad pa ni ches ma brtags pa te/ Legs ldan 'byed rang nyid dngos po nmams gzhan las skye ba 'phags pa'i dgongs par khas len pa'i 'dod pa tsam yang khong du ma chud pa'i gtam du snang ba'i phyir ro// (TTChen, H173a2-4)

〔ある人が〕『般若灯論・釈疏』により、「論師（ナーガールジュナ）の聖教において“他よりの生起”と“生起の有意義性・有窮性”をお認めにならない定説と矛盾する」と説明するのは、全く考察の加えられていないものである。なぜなら〔それは〕、清弁自身が「“諸事物は他より生じる”というのが聖者（ナーガールジュナ）の密意である」と承認する〔そうした〕主張のみさえも理解できていない人の話にみえるからである。

ソナムタクパの言うように、ツォンカパに反してケードゥプは観誓注の所説そのものを否定したのだろうか。この点で問題となるのは、上の TTChen 蔵文下線部の動詞 “'chad pa” の主語を誰とみるかである。観誓注を自説の教証として引用するツォンカパ『中論注』の場合、*rTsa ſtk*: “*'grel bshad kyis slob dpon gyi lung las …… grub mtha' dang 'gal zhes 'chad do*//” 下線部の動詞 “'chad” の主語が観誓注であるのは間違いない¹⁷。それと同じように、ソナムタクパがそうしたように、TTChen の下線部の動詞 “'chad pa” の主語を観誓注とみた場合、ケードゥプはインドの論師観誓に対して、「『釈疏』が～と説明するのは、全く考察の加えられていないもの」と露骨に批判したことになるが、それは、まずあり得ないことのように思える。ケードゥプは上の観誓注の引用をきっかけとして、それ以下の論述 (TTChen, H173a3-b1) において、ツォンカパ『中論注』には見られない観誓注をめぐる議論を展開するが、それは観誓注そのものの妥当性ではなくて、観誓注の解釈をめぐる議論になっている¹⁸。そうであるなら、TTChen: 「～と説明する ('chad pa)」の主語は、観誓注そのものではなくて、上の拙訳のごとくテキストに記されていないが“チベットのある人”で、ここでケードゥプが「全く考察の加えられていないもの」と厳しく批判するのは、「“ある人”の観誓注解釈」「観誓注によった“ある人”の所説」と理解すべきかと思われる¹⁹。

17. Cf. Samten/Garfield [2006: 63] ; クンチョック/奥山 [2014: 69].

18. 第II節注 33)、34)、35) 参照。

19. Cabezón [1992: 296]、ツルティム/藤仲 [2003: 150] の両訳とも、TTChen のこの箇所を観誓注の所説そのものに対する批判とはみていない。なお、ケードゥプは“帰謬の反転”の論述において清弁が世俗的に“他よりの生起”を認めることを強調する。よって《2.2 定説との矛盾》においても、清弁が仏護注と定説との矛盾を指摘したのは、仏護注が本来絶

[3] ギェンサンワ批判について

前述したように《3.3.4 異説(ギェンサンワ説)批判》(TTChen,H176b4-177a3)はツォンカパ『中論注』にはみられない。TTChen では仏護注に基づいて構成した清弁流の帰謬(〈B1〉〈B1〉)と月称流の帰謬(〈C1〉〈C1〉)の相違を解説した後に“ある清弁解釈”をこう示す。

そうではなくて、清弁は過失を示すとき、こう述べているのだ—論証(能証)を投げかけない帰謬のみによっては[“自よりの生起”を]否定することはできないから、帰謬によって論証を投げかけなければならない。そこで[仏護の示した]帰謬は、

〔宗〕芽—主題—は、再び生じるのが有意味・有窮でないという不合理なことになる。

〔因〕自より生じるから。

というもので、そしてそれ(帰謬)によって反転させた論証が投げかけられているが、それは、

〔宗〕芽—主題—は、自より生じることがない。

〔因〕再び生じるのが有意味・有窮であるから。

というものになる。よって[これは]論師(ナーガールジュナ)が“再生起の有意味性・有窮性”をお認めにならないことと矛盾する、と²⁰。

TTChen には前主張者として具体的な論師の名は言うまでもなく“ある人”とさえも述べられていないが、すでに小林[2014]で指摘したように、ケードゥプはここで、彼と同時代のゲルク派論師で、第3代セラ寺座主も務めたクンル・ギェルツェンサンポ(Gung ru rGyal mtshan bzang po,1383-1450; 以下、ギェンサンワ rGyan bzang ba と略)の『中観千葉(*dBu ma'i stong thun/BMTT*)』の所説を前主張として提示していると思われる。ギェンサンワの著作は長らく稀観書であったが、2007年に活字洋装本の著作集3巻が出版された。そ

対否定であるべき“自よりの不生”を反転させた相対否定を認めることになるからであって、“他よりの生起”そのものを認めることになるからではないと、ケードゥプは論じる(TTChen,H172b3-173a2)。それに対してソナムタクパは、例えば清弁『般若灯論』に“*dnegos po rnam gzhan las skye bar 'gyur ba*”とあるのも“自よりの生起”と対比されるところの“他よりの生起”の意味ではないとして、ケードゥプ説に批判的立場をとる(第II節注24)参照)。ソナムタクパが「ケードゥプは観誓注を否定する」と理解したのも、清弁における“他よりの生起”の承認と矛盾するようにもみえる観誓注の所説をケードゥプは否認したに違いないと考えたからかもしれない。

20. TTChen,H176b4-6.

の第3巻所収の BMTT に、こうある。

論師清弁は、こう言う一自立論証因に力点を置いて“自よりの生起”を否定するのか、又は帰謬に力点を置いて否定するのか。前者によると、それは正しくない。なぜなら、[仏護注では] 自立論証の証因と喩例を述べていないから、そして主張命題について対論者の[指摘した] 過失を取り除いていないからである。後者によると、論証を投げかけない単なる帰謬のみによって[“自よりの生起”を] 否定することはできないから、論証を投げかける帰謬が必要である。そうであるなら[仏護注の文言は] 論証を投げかける帰謬の文言であるから、論証式の問題となっている意味(この場合は帰謬の証相“自よりの生起”)を反転させることによって“自より生じることがない”が[論証の] 所証[となり]、そしてその帰謬の帰結の属性(“再生起の無意味性・無窮性”)の反転させた意味が顕わとなるから“再び生じるのが有意味・有窮である”[が論証の証相] となるが、論師(ナーガールジュナ)の流儀では“再生起の有意味性・有窮性”をお認めにならないから、自己の定説と矛盾することになる、と[清弁は言う]。それゆえ、帰謬を反転させたとき、
[宗] 芽—主題—は、自より生じることがない。

[因] 再び生じるのが有意味・有窮であるから。

このような[論証] となるから、自己の定説と矛盾する、と[清弁は] 言う²¹。

ケードップの示す前主張“ある清弁解釈”が上のギェンサンワ説であるという点に関しては、ジャムヤンシェパ作『中観考究('Jam dBu mtha' dpyod)』の記述も参考になる。ジャムヤンシェパは、同書において、「清弁の過失の述べ方に関して法主ギェンサンワは言う(chos rje rGyan bzang ba na re)」とし、

21. BMTT, pp.286,12-287,5 : slob dpon Legs ldan 'byed na re/ gal te rang rgyud kyi gtan tshigs kyi dbang du byas nas bdag skye 'gog par byed dam/ thal 'gyur gyi dbang du byas nas 'gog par byed/ dang po ltar na de ni mi rigs te/ rang rgyud kyi gtan tshigs dang/ dpe ma brjod pa'i phyir dang/ dam bca' la gzhan gyi nyes pa ma bsal ba'i phyir ro// gnyis pa ltar na/ sgrub byed mi 'phen pa'i thal 'gyur tsam gyis 'gog par mi nus pas sgrub byed 'phen pa'i thal 'gyur dgos la/ de ltar na sgrub byed 'phen pa'i thal bar 'gyur ba'i ngag yin pa'i phyir/ sbyor ba'i skabs kyi don las ldog pas bdag skye med par sgrub (⇒pa bsgrub *) par bya ba dang/ thal 'gyur de'i chos ldog pa'i don mngon pas slar yang skye ba don bcas thug bcas su 'gyur la/ slob dpon gyi lugs la slar yang skye ba don bcas thug bcas mi bzhed pas rang gi grub mtha' dang 'gal bar 'gyur ro// zhes pa'o// des na thal 'gyur ldog pa na/ myu gu chos can/ bdag las skye ba med de/ slar yang skye ba don bcas dang thug bcas yin pa'i phyir ro// zhes pa 'dir 'gyur bas na rang gi grub pa'i mtha' dang 'gal lo zhes zer ro// *Cf.rJe btsun dBu spyi don, S¹97a2, S²227,18: bdag skye med pa bsgrub bya dang/ 上の下線部が文言と内容の点で TTChen にほぼ一致、破線部は PP。藏文斜体部については、後注 25 参照。

BMTT にみられるギェンサンワに特徴的な清弁解釈 (BMTT, pp.286,6-288,3) をほぼ引用し、その後にそれを批判する。その批判においてジャムヤンシェパは、TTChen における今問題にしている前主張へのケードゥプの批判 (TTChen, H177a1-3) を典拠として引用する²²。このことは、ジャムヤンシェパが、ケードゥプが提示した前主張を、“ギェンサンワの清弁解釈”と認識していたことを示す。

ギェンサンワは、ケードゥプと同じくツォンカパの直弟子でありながら師説を批判したため、ケードゥプに叱責されたと伝えられる論師である²³。その伝承の通り、ケードゥプは“帰謬の反転”の論述において、ギェンサンワ説を、批判対象として取り上げているのだろう。

ここで、ついでに、上のギェンサンワの清弁解釈の特徴として2点を指摘しておくことにする。第1に、上の TTChen に、ギェンサンワが解釈するところの、仏護注に基づいて清弁が構成した帰謬と、それを反転させた論証が示されているように、ギェンサンワは、「清弁は仏護注の文言を“帰謬の文”とみなした」と理解し、清弁のいう“反転”を帰謬の換質换位の意味にとる。尤も上引 BMTT にその帰謬は示されていない。しかしパンチェン・ソナムタクパが引用する“*sTong thun chung ba*(=BMTT) に従うある人”の主張に、「〔宗〕外的・内的な諸事物—主題—は、再び生じるのが無意味・無窮という不合理なことになる。〔因〕自より生じるから」という、TTChen に示されるものと基本的に同一の帰謬が示されている²⁴。ギェンサンワ説のこの第1の特徴は、本節〔1〕で解説したケードゥプ説の場合と同じである²⁵。

22. 'Jam dBu mtha' dpyod, 234a4-235a1.

23. ツォンカパ／ギェンサンワ／ケードゥプの関係については、ツルティム／藤仲 [2001:19]、西沢 [2011:549]、小林 [2014:104-105] 参照。

24. Paṇ dBu spyi don, 45b4-5 : phyi nang gi dngos po rnam chos can/ slar yang skye ba don med dang thug med du thal/ bdag las skye ba'i phyir/ なおソナムタクパの言及する“*sTong thun chung ba* (千藥小論)”が BMTT である点については、小林 [2014] 参照。

25. この点に関連して興味深いのは、前注 21 にあげた BMTT 蔵文の斜体部にある“*thal 'gyur de'i chos*(その帰謬の帰結の属性)”である。『般若灯論』“*bsgrub par bya ba dang/ de'i chos bzlog pa'i don mngon pas*” 下線部は、観誓注 (PPTik, D(Wa)74b1-2, P(Wa)87a1-3) に従って、仏護注における証相“生起の無意味性・無窮性”を意味するとするのが一般的で、その場合それを反転させた“生起の有意味性・有窮性”が論証の証相となる。これに対して BMTT “*thal 'gyur de'i chos*”は、ギェンサンワ想定 of 清弁の構成するその帰謬の帰結の属性“再生起の無意味性・無窮性”で、ギェンサンワ説ではそれを反転させたもの

次に、上のギェンサンワの清弁解釈の第2の特徴は、清弁も仏護注に基づいて月称と同じように“再生起(slar yang skye ba)”を扱っているとする点で、これがツォンカパ説への批判となる。この問題について、まずツォンカパはこう言う。

月称の「帰謬を反転させた意味と〔われわれ中観派〕自身は結び付かない」というこの所説により、次のことが示されている—清弁でさえも、「〔仏護は〕“再び生じることが無意味・無窮になる”という具合に帰謬を投げかけた」とお考えにならずに、「“一般的に生じることが無意味・無窮になる”という具合に〔帰謬を〕投げかけた」と把握した上で、「〔仏護はそれを〕反転させた意味（“生起一般の有意味性・有窮性”）を認めなければならない」と論じている、と²⁶。

月称『明句論』の「帰謬を反転させた意味と中観派自身は結び付かない」という所説により清弁が“生起一般の無意味性・無窮性”を扱うだけであることが示されたとするのが、ツォンカパの論理である。その論理は分かりにくい、ソナムタクパの解説を参考になると、それはこうなるだろう—ツォンカパの取り上げる今問題の『明句論』の一節は、直接的には、月称の構成した帰謬（〔宗〕諸事物は、再び生じるのが無意味・無窮となる。〔因〕自己の原因時に既に成立しているから。）を反転させた意味“再生起の有意味性・有

が論証の証相“再生起の有意味性・有窮性”となる。つまり、ギェンサンワは、仏護注の文言を“帰謬”とみなした上で清弁のいう“反転”を帰謬の換質換位の意味にとるために、『般若灯論』“de'i chos”を、BMTT “thal 'gyur de'i chos”に、意図的に読み替えたのだろう。よって、前注21のBMTT蔵文斜体部は、『般若灯論』の本来の趣旨とはだいぶ異なり、上の本文に示した和訳のようになる。Cf. *rJe btsun dBu spyi don*, S¹ 98a3-4, S² 230,7-12 : kho na re/ skabs kyi don las bzlog pas zhes sogs kyi don ni/ skabs kyi don myu gu chos can/ slar yang skye ba don med dang thug med yin par thal/ bdag las skye ba'i phyir zhes pa'i thal 'gyur gyi rtags bzlog pas myu gu bdag las skye ba med pa bsgrub bya dang/ thal 'gyur de'i thal chos bzlog pa'i don mngon pas slar yang skye ba don bcas dang thug bcas rtags su 'gyur bas slob dpon gyi grub mtha' dang 'gal zhes pa'i don yin zhe na/ これはセラ・ジェツンパがギェンサンワ説をパラフレーズしたもので、下線部にギェンサンワの清弁理解がよく現われている。

26. *rTsa t̥ik*, S55,6-9, T32b4-6: Zla bas *thal ba bzlog pa'i don dang rang ma 'brel bar bstan pa 'dis ni* Legs ldan gyis kyang/ slar yang skye ba don dang thug med du thal ba 'phangs pa ma dgongs par spyir skye ba don dang thug med du 'phangs par bzung nas bzlog don khas len dgos zhes smras par bstan to// Cf. PSP, (Tib) D7b7-8a1, P8b5-6; (Skt) p.23,3-4: prasaṅga-viparītena cārthena parasyaiva sambandho nāsmākaṃ svapratijñāyā abhāvāt/ tataś ca siddhāntavirodhāsambhavaḥ/

窮性”が、対論者であるサーンキャ派だけに結び付くことを示す；たしかに清弁は、仏護注により彼が構成した帰謬の反転させた意味を仏護は承認すべしと批判するが、しかしさすがの清弁も、「仏護は、諸事物の再生起の有意味性・有窮性を認めるのか」という疑念を抱いたり、「仏護はそれを承認すべし」と無茶な論難を行うことは、まずあり得ない；よって『明句論』のその問題の一節は、間接的に、「清弁の構成した帰謬では、“再生起”を扱う月称の場合とは異なり、“生起一般(spyir skye ba)の無意味性・無窮性”が投げかけられている、そして清弁は、仏護はそれを反転させた意味“生起一般の有意味性・有窮性”を承認すべしと論じている」ということを示す、と²⁷。

このようなツォンカパ説に対して、BMTTにはこう述べられている。

〔清弁は〕「〔仏護注において〕再生起するのが無意味・無窮となると帰謬が投げかけられている」と理解した上で、「〔帰謬を〕反転させた意味（“再生起の有意味性・有窮性”）を承認したなら定説と矛盾する」と、論難する。

27. *Paṇ dBu spyi don*, 46a3-6 : *Tshig gsal gyi lung des/ Legs ldan gyis bdag skye 'gog pa'i thal 'gyur gnyis po de/ dngos po rnams bdag las skye ba med de/ zhes sogs kyi 'grel tshig gi skabs su 'phangs par dgongs pa bkag pa'i phyir te/ de ma bkag na Legs ldan byi (⇒gyi) rgyud la Sangs rgyas bskyangs dngos po rnams slar yang skye ba don bcas dang/ thug bcas su 'dod snyam pa'i dogs pa yod dgos pa la/ dogs pa de 'dra Legs ldan la 'byung ba gtan mi srid pa'i phyir/ de ltar yang rTsa she'i rnam bshad las/ zhes gsungs te/ ; 和訳：「その『明句論』の資料により、「清弁は、“自よりの生起”を否定するその2つの帰謬（月称流の帰謬：〔宗〕諸事物は、再び生じるのが無意味・無窮となる。〔因〕自己の原因時に既に成立しているから。）が“諸事物は自より生じることがない”等の〔仏護の〕注釈文の文脈において投げかけられている、と考えていらっしゃる」ということが否定されるから。すなわち、そのことが否定されなければ、清弁の心相続のなかに、「仏護は、諸事物が再び生じるのが有意味・有窮であると認めるのか」という疑念が存在しなければならないのに、そのような疑念が清弁に起こることは全くあり得ないからである。そのように又〔ツォンカパ〕『中論注』に……と説かれている。」 Cf. *rJe btsun dBu spyi don*, S¹ 99a4-5, S² 232, 14-19 : slar yang gi don dgongs na/ 'grel ngag des bstan pa'i thal 'gyur gyi thal chos bzlog pa'i don Sangs rgyas bskyangs kyis khas ma blangs par Legs ldan 'byed kyi ngor sgrub mi dgos te/ slar yang skye ba don bcas dang thug bcas Sangs rgyas bskyangs kyis khas ma blangs par slob dpon Legs ldan 'byed rang nyid kyis grub zin pa'i phyir/ de ltar yang rNam bshad Rigs pa'i rgya mtsho las/ ; 和訳：「〔清弁は〕“再び”の意味をお考えになっている〔と言う〕なら、「〔仏護の〕その注釈文によって示されている帰謬の帰結の属性（“再生起の無意味性・無窮性”）を反転させた意味（“再生起の有意味性・有窮性”）を、仏護は承認していない」ということを、〔月称がわざわざ〕清弁に向かって論証する必要はない。なぜなら、「“再生起の有意味性・有窮性”を、仏護は承認していない」ということは、論師清弁自身によって既に成立しているからである。又そのように〔ツォンカパの〕『注釈・正理の大海』に……」*

なぜなら[清弁が]“再び (slar yang)”の意味をお考えになっていないなら、[月称が]「[帰謬を反転させた]“再生起の有意味性・有窮性”はサーンキヤ派によって承認されているが中観派は承認しないから定説と矛盾しない」と回答しているのも、無関係[となる]からである。どのように回答したのかというと、『明句論』に、「帰謬を反転させた意味とも対論者だけが結び付くのであって……」と、明説されている²⁸。

ツォンカパは、『明句論』の一節「帰謬を反転させた意味と中観派自身は結び付かない」によって、清弁が“再生起”ではなく“生起一般”を問題にしていたことが示されているとした。一方ギェンサンワによると、その『明句論』の一節が意味をもつのは、清弁が“再生起”を問題にし“再生起の有意味性・有窮性”を仏護に認めさせようとするからこそで、それを回避するために『明句論』のその一節は説かれたことになる。ギェンサンワはツォンカパの直弟子だが、伝承の通り、上のギェンサンワ説はツォンカパ説を批判したものにはかならないだろう。

なお、上の『明句論』の一節に関連して、ツォンカパは、「中観派は帰謬を反転させた意味と結び付かないというのは“自よりの生起”を否定する言わば特殊な帰謬についてであって、それ以外の中観派の投げかける帰謬一般には当てはまらない」、「中観派が帰謬を反転させた意味を承認するケースと承認しないケースの2つがある」、そして「一般に中観派に主張が存在しないわけではない」と論じる。これらの所説はツォンカパ中観説の特徴の一つとして注目される。ツォンカパ『中論注』等の関連資料と、その所説をケードゥプが継承していることは、第Ⅱ節の和訳注記で示すことにしたい²⁹。

28. BMTT, p.287, 10-19 : slar yang skye ba don med dang thug med du thal ba 'phangs par go nas ldog don khas blangs na grub mtha' dang 'gal zhes rtsod pa yin no// slar yang gi don ma dgongs na/ slar yang skye ba don bcas thug bcas Grangs can pas khas blangs la/ dBu ma pas khas mi len pas/ grub pa'i mtha' dang mi 'gal lo zhes lan btab pa yang 'brel ba med pa'i phyir rol/ lan ji ltar du btab ce na/ Tshig gsal las/ thal bar 'gyur ba ldog pa'i don dang yang pha rol po nyid 'brel ba yin gyi/ kho bo cag ni ma yin te/ rang la dam bca' ba med pa'i phyir rol/ de'i phyir kho bo cag la grub pa'i mtha' dang 'gal ba (ga la) yod/ ces gsal bar gsungs so// 所引の『明句論』の梵文は、前注 26 参照。

29. 第Ⅱ節注 10)、54)、65) 参照。

II TTChen “帰謬の反転” 和訳

0 仏護／清弁の所説：『明句論』における引用(H169a5)

〔仏護説〕[“自よりの生起”の否定に関して月称作]『明句論』では、

論師仏護も、「〔略説〕諸事物は、自より生じることがない。それらの生起が無意味となるから、そして過度の拈がりとなるから。〔広説〕自己の自体として現に存在する諸事物には、再び生じることには必要性がない。またもし現に存在しているのに生じるならば、如何なるときでも生じないことにならないだろう」と説いている¹⁾。

と、仏護がどのように説明するかを提示する。

〔清弁説〕その後、それに関して清弁が批判の仕方を述べたのが、『明句論』に、

ここで、ある人(清弁)は、「それは正しくない。証因と喩例を述べていないから、そして他者によって述べられた過失を取り除いていないから。帰謬の文であるから、問題となっている意味を反転させることにより、所証とその属性を反転させた意味が顕わとなるから、“諸事物は他より生じる”ことになる、“生起が有効(有意味)である”ことになる、そして“生起が有窮である”ことになるゆえ、定説と矛盾するだろう」と、過失を論じる²⁾。

と説かれている。

1) PSP, (Tib) D5b1-3, P6a2-4 ; (Skt) p.14,1-3 : Ācārya-Buddhapālitas tv āha/ na svata utpadyante bhāvāḥ/ tadutpādavaiyarthīyāt/ atiprasaṅgadoṣāc ca/ na hi svātmanā vidyamānānām padārthānām punarutpāde prayojanam asti/ atha sann api jāyeta/ na kadā cin na jāyeta/ iti// ; BPV, D161b4-5. 『明句論』蔵訳 “shin tu thal bar 'gyur ba'i phyir ro (atiprasaṅgadoṣāc)” に対応する仏護注の蔵訳は “skye ba thug pa med par 'gyur ba'i phyir ro (生起が無窮となるから)”。Cf. 丹治[1988:128,n.115]。なおケードップによると、月称は上の仏護注の文言を前半後半に二分して前半を略説 (mdor bstan)、後半をその広説 (rgyas bshad) とみなし、広説をふまえて仏護説の真意を解説しようとする。それに従い和訳中に〔略説〕〔広説〕を入れておいた。一方、清弁は、そのように二分することなく、仏護注前半の略説の部分のみを仏護説批判の対象として取り上げることになる。後注 11)、49) 参照。

2) PSP, (Tib) D5b3-4, P6a4-6 ; (Skt) pp.14,4-15,2 : atraikē dūṣaṇam āhuḥ/ tad ayuktaṁ/ hetu-dṛṣṭāntānabhidhānāt/ paroktadoṣāparihārāc ca/ prasaṅgavākyatvāc ca prakṛtārthaviparyayeṇa viparītārthasādhayataddharmavyaktau parasmād utpannā bhāvā janmasāphalyāt/ janma-nirodhāc ceti kṛtāntavirodhāḥ syāt// ; PP, D49a6-b1, P58b8-59a2. 『明句論』蔵訳とそれに対応する『般若灯論』蔵訳の相違については、第I節注 5、後注 17) 参照。

この〔清弁による〕論難そのもの及び〔それへの月称による〕回答の意味は、極難解の処であるから、説明することにしよう。

1 “ある人”の清弁／月称理解とそれへの批判(H169b3)³⁾

それも、ある人はこう言う—

〔清弁による仏護批判〕〔清弁の言う〕「問題となっている意味を反転させることにより」等の意味は、「正しい帰謬であるなら論証（能証）を投げかけなければならないから、仏護によって述べられたその帰謬によっても、論証を投げかけなければならない。そうであるなら〔仏護の述べた〕帰謬の証相（“生起が無意味・無窮となるから”）を反転させたものが所証法、そして帰謬の所証法（“自より生じることがない”）を反転させたものが証因となるから、

〔宗〕諸事物は、生起が有意味・有窮である。

〔因〕他より生じるから。

というのを“正しい証因”と承認しなければならない。よって、そうであるなら、自己の定説と矛盾する」ということである⁴⁾。

〔月称による清弁批判〕吉祥なる月称がまさしくその過失を断じる仕方は、こうである—「中観派であるなら自立論証を承認するのは不合理である

3) 《1 “ある人”の清弁／月称理解とそれへの批判》(TTChen, H169b3-170b4) は、ツォンカパ作『中論注(rTsa tīk)』にはみられない。この前主張者“ある人”は、不明。

4) 前主張者“ある人”の清弁理解の特徴は次の2点である。

〈1〉正しい帰謬(thal 'gyur yang dag)であるなら定言的な論証（能証 sgrub byed/*sādhana）を投げかけなければならない。

〈2〉論証の投げかけ方として、仏護の述べた帰謬の証相を反転させて所証法とし、帰謬の所証法を反転させて証相とするという具合に、清弁のいう“反転”を換質換位とする。第2の点について解説するなら、“ある人”は仏護注の文言のいわゆる略説（「諸事物は、自より生じることがない。それらの生起が無意味となるから、そして生起が無窮となるから。」）をそのまま“正しい帰謬”とみなした上で、それを反転（換質換位）させることにより、

〔宗〕諸事物は、生起が有意味・有窮である。〔因〕他より生じるから。
という独特な論証—“自よりの不生”の論証になっていない—を導く。しかしそもそも仏護注にあるままの文言は、定言的な論証でないのは言うまでもなく、“正しい帰謬”でもないゆえ、それを換質換位すると奇妙な論証が導き出されることになる。後注 28) 参照。ケードゥブは後に《3.3.1 清弁の考え方》(TTChen, H175a5-6)において、清弁が仏護注に基づいて構成したと想定される形式的に“正しい帰謬”（〈B1〉〈B2〉）を示す。第I節〔1〕参照。

から、帰謬によって投げかけられた論証を承認しないし、単に帰謬を立てただけのことで論証を投げかけるのでもない。なぜなら、話者は論証を投げかけようと望んで論じたのではないから、そして言葉とは、話者が述べようと望んだ意味のみを示すのであって、論者を不自由にするものではないからである。それゆえ〔仏護の述べた帰謬は〕単に対論者に対して承認説の矛盾を示す帰謬のみであるから、過失は存在しないと、〔月称は〕回答する⁵⁾。

—このように〔ある人は〕言う。

〔“ある人”の帰謬派月称理解への批判〕それは、全く正しくない。なぜなら「〔中観帰謬派が〕自立論証を承認しないとしても“正しい証因”を承認することに矛盾はない」ということは上で詳しく説明してあるから⁶⁾、そして「“正

5) 前主張者“ある人”の月称理解の特徴は次の2点である。

〈1〉中観派は自立論証を承認しない。

〈2〉中観派の立てる帰謬は、対論者に対して承認説の矛盾を指摘するだけで、論証を投げかけることはない。

この“ある人”の月称理解は、以下の『明句論』の記述に基づいている。〈1〉PSP,(Tib)D6a1, P6b3-4;(Skt)p.16,2 : na ca Mādhyamikasya svataḥ* svatantram anumānam kartuṃ yuktaṃ pakṣāntarābhyupagamābhāvāt/(*丹治[1988:132,n.130]:“sataḥ”) ; 和訳:「中観派が自ら自立的推理を構成するのは不合理である。他の主張を承認することがないから。」; 〈2〉PSP,(Tib) D8a2-4, P8b7-9a2 ; (Skt) p.24,2-6 : niḥsvabhāvabhāvavādinā sasvabhāvabhāvavādināḥ prasaṅga āpadyamāne kutaḥ prasaṅgaviparītārthaprasaṅgitā/ na hi śabdā dāṇḍapāsikā iva vaktāram asvatantrayanti/ kiṃ tarhi satyāṃ śaktau vaktur vivakṣām anuvīdhīyante/ tataś ca parapratiññāpratiśedhamātraphalatvāt prasaṅgāpādanasya nāsti prasaṅgaviparītārthāpattiḥ/ ; 和訳:「無自性論者が有自性論者に帰謬論証をおこなうとき、〔自らが〕帰謬を反転させた意味を有すという不合理なことに、どうしてなろうか。なぜなら、言葉とは、警棒と捕縄をもつ〔警官〕のように話者を不自由にするのではないから。しからばどうなのかという、〔言葉に〕能力があるとき、〔言葉は〕話者の意思に従うのである。それゆえ、不合理な帰結に陥らせる(帰謬論証)は、対論者の主張を否定することだけを結果とするのであるから、帰謬を反転させた意味に陥ることはないのである。」Cf.丹治訳[1988:18-19]。

なお上の『明句論』の后者の一節〈2〉の内容は、後に、この一連の“帰謬の反転”の議論の最後《3.3.5月称説の解説：帰謬の目的》(TTChen,H177a3 以下)で扱われる。

6) 「上で詳しく説明した (gong du rgyas par bshad zin)」とあるが、この「中観帰謬派は自立論証 (rang rgyud) を承認しないが正しい証因 (gtan tshigs yang dag) は承認する」という問題に関して、ケードップは既に先行する議論 (TTChen,H145b4 以下) において、《否定対象を否定する帰謬派と自立派の相違を説明する》という項目のもとに、《他説の否定》《自説の確立：1 帰謬派と自立派の意味を説明する；2 自立論証を承認しない理由を説明する；3 その同じことを『明句論』と結びつけて説明する》を詳しく説明している。Cf.Cabezón[1992:257ff.] ; ツルティム／藤仲[2003:112ff.]。

しい帰謬であるなら論証（能証）を投げかけないのが必然的である”と認めるのが帰謬派の流儀である」と論じるのも全く不合理であるからである。すなわち〔後者に関して月称作〕『入中論自注』に、

他に依存して、もし、何か他なるものが生じるなら、しからば、
炎からも濃い闇が生じることになるだろう。(MAv,6.14ab)

なぜなら、他であるから。〔しかし〕それは、現に見られることでもないし、理に適っていることでもない。それゆえこれ（他よりの生起）は存在しない。まさにこのゆえに、

原因と結果が他であることは、決して正しくないだろう⁷⁾。

そして、

あらゆるものからもあらゆるものが生じるだろう。

なぜなら……(MAv,6.14c)⁸⁾

という〔根本頌〕の『自注』にも、

又、稲の芽が他なる稲の種子から生じるのと同じように、壺と布なども〔生じることに〕なるのに、それは現に見られることでもない。それゆえ、これ（他よりの生起）は存在しない⁹⁾。

とあるが、〔このように〕根本頌 (MAv,6.14ab/14c) により直接説かれているその2つの帰謬によって投げかけられた論証が注釈により明確に説明されているからである¹⁰⁾。ほかにもこのような〔記述〕は数多く見られるが、冗

7) MAvBh,p.89,6-11. MAv,6.14ab(Skt) : *anyat pratītya yadi nāma paro 'bhaviṣyaj jāyeta tarhi bahulaḥ śikhino 'ndhakāraḥ/*

8) MAv,6.14cd(Skt) : *sarvasya janma ca bhavet khalu sarvataś ca tulyaṃ paratvam akhile 'janake 'pi yasmāt//*

9) MAvBh,p.90,6-9.

10) ここはツォンカパ『入中論注 (*dGongs gsal*)』の次の記述をうけている。*dGongs gsal*, S160,13-14(O55), T99b4 : *thal ba gnyis ka la bzlog pa 'phen pa 'grel par bshad do//* ; 和訳 : 「〔“他よりの生起”を否定する〕2つの帰謬（「炎からも濃い闇が生じることになる」「あらゆるものからもあらゆるものが生じることになる」）いずれについても、それを反転させた〔論証〕を投げかけることが、注釈（『入中論自注』）に説明されている。」

ケードップは《3.3.5 月称説の解説：帰謬の目的》(TTChen,H177a5-6)において、ツォンカパ『中論注』の所説 (*rTsa tīk*,S55,11-14, T32b6-33a1) を承けて、前注 5) に示した『明句論』の一節「無自性論者が有自性論者に帰謬論証をおこなうとき、〔自らが〕帰謬を反転させた意味を有すという不合理なことに、どうしてなろうか」を引用した後に、「これは帰謬一般のことではなくて、“自よりの生起”を否定する2つの帰謬のことである」と

長となるので、書かないことにした。

〔仏護説の理解の仕方について〕〔月称作〕『明句論』が仏護の帰謬文そのものの意味を説明するとき、〔仏護注後半の〕「自己の自体として現に存在する諸事物には」というのを、〔同注前半の〕「それらの」という〔語句〕の広説とみなした上で、それ（“自己の自体として現に存在する”）こそを証相と説明し、又〔同注後半の〕「再び生じることに必要性がない」というのを、〔同注前半の〕「生起が無意味となる」という〔語句〕の広説、そして〔同注後半の〕「又もし現に存在しているのに生じるならば、如何なるときでも生じないことはないだろう」というのを、〔同注前半の〕「過度の広がりとなる」という〔語句〕の広説とみなした上で、その2つ（“〔略説〕生起の無意味性⇒〔広説〕再生起の無意味性”と“〔略説〕過度の広がり／生起の無窮性⇒〔広説〕再生起の無窮性”）を帰謬の不合理な帰結の属性と説明するのであって、“生起の無意味性・無窮性”を証相とは説明していない¹¹⁾。ゆえに〔ある人

述べる（後注 65）、及び後注 54）参照）。つまり、ツォンカパ／ケードゥプは、“自よりの生起”を否定する特殊な帰謬を描くなら、帰謬派が立てた帰謬によって定言的な論証が投げかけられることがあるとする。Cf. *dGongs gsal*, S164,9-11(O59), T102a1-2: *ha cang thal ba gnyis la ni thal ba'i bzlog don rang nyid kyis khas len pas/ thal ba las bzlog pa'i don la rang gis khas len pa dang mi len pa gnyis shes par bya'o//*; 和訳：「2つの過度の広がり（「炎からも濃い闇が〜」「あらゆるものからも〜」）の場合は、帰謬の反転させた意味を〔中観派〕自身が承認するから、帰謬を反転させた意味を〔中観派〕自身が承認するケースと承認しないケースの2つがあると知るべきである。」この考え方に基づいてケードゥプはここで、前主張者“ある人”が『明句論』の所説に基づいて「中観帰謬派は帰謬によって投げかけられた論証を承認しない」と主張するのを批判する。

11) この仏護注の文言を解説する仕方は、ほぼ月称『明句論』の以下の記述による。PSP,(Tib)D7a1-3, P7b4-7;(Skt)p.20,1-6:*na svata utpadyante bhāvāḥ/ tadutpādavaiyarthād iti vacanāt/ atra hi tad ity anena svātmanā vidyamānasya parāmarśaḥ// [kasmād iti cet/] tathā hi tasya [sam]grahen[okta]vākyasyaitad* vivaraṇavākyam/ na hi svātmanā vidyamānānām punarutpāde prayojanam iti/ anena ca vākyena sādhyasādhana dharmānugatasya para-prasiddhasya sādharmyadṛṣṭāntasyopādānam/ tatra svātmanā vidyamānasyety anena hetu-parāmarśaḥ/ utpādavaiyarthiāḍ ity anena sādhyadharmaparāmarśaḥ//*; 和訳：「〔仏護注略説に〕「諸事物は自より生じない。それらの生起が無意味となるから」と説かれているからである。実にそのうち「それら(tad/de dag)」というこの〔略説中の語〕により、〔広説の〕「自己の自体として現に存在するもの」が指示される。〔どうしてかというなら〕すなわち、「実に自己の自体として現に存在する諸〔事物〕にとって再び生じることに必要性はない」というこの〔文〕は、その略説された文の (mdor bzhag pa'i ngag de'i) 解説文(広説)であり、この文によって他者に極成の所証法と能証法を有した同類喩が述べられている。そのうち「自己の自体として現に存在する」という〔語句〕によって証因が指示

が] 自説においてもそれら2つ(“生起の無意味性・無窮性”)を証相として承認するのは、余りにも考察が加えられていない¹²⁾。

〔“ある人”の清弁理解への批判〕又〔ある人の言うごとく〕「正しい帰謬であるなら論証を投げかけるのが必然的である」ということは、正理に心を少しばかり向けたことのあるそれ以上の人は誰も承認する余地がないから、清弁のごとき完璧な大学者たちがそのように承認することが、どこにあり得るだろうか¹³⁾。

2 清弁説の解説(H170b4)

それゆえ、前主張(清弁説)の意味は¹⁴⁾、こうである—仏護によって説明されたその論証式によって“自より生じることがない”と論証する証相と喩

される。「生起が無意味となるから」というこの〔語句〕によって所証法が指示される。」Cf. 丹治訳[1988: 15-16]. * Skt. Poussin ed. 破線部 “[kasmād iti cet/] tathā hi tasya [saṃ]grahṇ[okta]vākyasyai-” の問題点、蔵訳 “mdor bzhaḡ pa'i ngag de'i” の原梵語: “asya grahaṇakavākyasyai-” については、丹治[1988: 144, n.156, 157] 参照。

上の月称による仏護注の捉え方は、ケードップは後に繰り返し解説する(TTChen, H173b6ff., 175b3ff.)。又ケードップの解釈する、月称が仏護注に基づいて構成した帰謬(C1) (C2)は、《3.3.2 月称の考え方》(H175b3-5) に示される。

12) テキスト TTChen, H170b2-3 : rang lugs la yang de dag rtags su khas len pa ni ha cang yang rnam par ma brtags pa yin la/ 下線部のうち「自説においても(rang lugs la yang)」が分かりにくいのが、ここの TTChen において月称『明句論』の仏護注解説に従いつつ論を進めるケードップの行論からみて、「月称の仏護理解においてばかりでなく、仏護自身の説そのものにおいても」と読むのは可能だろう。つまり、前主張者“ある人”は、清弁による仏護批判を解説しつつ、仏護注の帰謬の証相を反転(換質换位)させた論証の所証法を“生起の有意義性・有窮性”とするのだから、彼は(清弁に従いつつ)仏護説における帰謬の証相を“生起の無意味性・無窮性”と承認している(khas len pa)ことになる。ケードップがここで月称の解説に依りつつ「余りにも考察が加えられていない」と批判するのは、“ある人”のそのような清弁に従った仏護説の理解の仕方かと思われる。Cf. Cabezón [1992: 293]、ツルティム/藤仲[2003: 147]。なお、ケードップの解釈によると、清弁が仏護注に基づいて構成した帰謬(B1) (B2)において“生起の無意味性・無窮性”は、帰謬の不合理な帰結の属性(thal chos)となる。この点に関しては、既に第I節[1]で解説した。

13) “ある人”に対してケードップは、清弁は「正しい帰謬であるなら論証を投げかけるのが必然的」とは承認していないと批判するが、それは、帰謬に“論証を投げかける帰謬”と“論証を投げかけない帰謬”の2つがあることを意図しているのだろう。Cf. rTsa tīk, S56, 15-16, T33b3: thal ba la yang bzlog pa 'phen pa dang mi 'phen pa gnyis yod do//

14) ここの「前主張(phyogs snga ma)」というのは、月称にとって前主張となる清弁説(清弁の仏護批判)である。ここの《2 清弁説の解説》(TTChen, H170b4-171a1)は、ほぼツォンカパ『中論注』(rTsa tīk, S52, 5-14, T31a2-5)に一致する。

例が何も述べられていないゆえ〔仏護説は〕単なる主張命題のみにすぎないから¹⁵⁾、そして、サーンキャ派が、「“自より”という〔語〕の意味が“現に顕わな結果の自体より”であるなら既に成立していることを論証しているのであり、又“未だ顕わではない原因の能力の自体より”であるなら生起を有する一切のものはそれより生じるにほかならないから遍充が矛盾することになる（つまり“自より生じない”ではなくて“自より生じる”ことになる）」と、〔仏護のいう〕主張命題を考察した上で過失を述べているのを取り除いていないから¹⁶⁾、〔仏護の説明は〕正しくない。

さらに『明句論』〔の蔵訳〕では「帰謬の文であるから (thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir)」と翻訳されているその同じものが、『般若灯論』〔の蔵訳〕では「余地のある文でもあるから (glags yod pa'i tshig yin pa yi yang phyir te)」と翻訳されているが¹⁷⁾、その意味は、「他の論者の非難の余地のある文であることから」〔仏護の説明は〕不合理である。

2.1 証相と所証の反転のさせ方(H171a1)

〔証相の反転のさせ方〕〔非難の〕余地がどのようにあるのか〔という〕なら、問題となっている意味〔つまり仏護注にある〕論証式の言葉そのまま（「〔宗〕諸事物は、自より生じることがない。〔因〕それらの生起が無意味となるから、そして生起が無窮となるから。」）を反転させる必要があるから〔非難の〕余地があることになる。すなわち〔仏護注にある〕論証式の言葉そのままの如くであるなら、「諸事物は、自より生じることがない」が所証で、「生起が無意味・無窮である」が証因であるが、その場合、証相の主題所属性（「諸

15) 「仏護によって説明されたその論証式によって (Sangs rgyas bskyangs kyis bshad pa'i sbyor ba des)」とあるのは、仏護注の文言をそのまま、「〔宗〕諸事物は、自より生じることがない。〔因〕それらの生起が無意味となるから、そして過度の広がりとなるから。」という論証式 (sbyor ba/prayoga) に見立てたことによる。Cf. 第I節[1].

16) サーンキャ派の指摘する過失：PP,D49a3-5, P58b3-5. Cf.PSP,(Tib)D6a5-6, P6b7-7a1 ; (Skt) pp.16,12-18,1 : Sāṃkhyāḥ pratyavasthāsyante/ ko 'yaṃ pratijñārthaḥ/ kiṃ kāryātmakāt svata uta kāraṇātmakād iti/ kiṃ cātaḥ/ kāryātmakāc cet siddhasādhanaṃ/ kāraṇātmakāc ced viruddhārthatā/ kāraṇātmanā vidyamānasyaiva sarvasyotpattimata utpādād iti// ; 丹治[1988:13-14].

17) 『明句論』蔵訳 “thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir” と『般若灯論』蔵訳 “glags yod pa'i tshig yin pa yi yang phyir te” の原梵語 (“prasaṅgavākyatvāc ca/*sāvakāśavākyatvāc ca”) の問題については、丹治[1988:129,n.118] 参照。Cf. 第I節注 5.

事物は、生起が無意味・無窮である」）が成立しないことになる、[諸事物の生起は無意味・無窮ではないゆえに]；たとえ「自より生じるなら[生起が無意味・無窮となる]」というのが証因であるとしても、[この場合は証因の主題所属性が成立したとき所証が成立したことになる[から論証式は無意味となる]¹⁸⁾；ゆえに[仏護注に]実際に述べられた通りに[論証式を構成するのは]妥当でない；それゆえ、ここでは2つの反転させた意味（“生起の有意味性・有窮性”）が証相であることを仏護自身も認めているのが顕わとなると、[このように]清弁は仏護の主張を受けとめたのである¹⁹⁾。

反転させた意味を証相として[仏護自身が]認めているのが顕わとなるあり方とは、[仏護注蔵訳にある]「なるから(’gyur ba’i phyir)」という前後2つの語句が反転させた[意味]を投げかける語句であるのが顕わとなる。どのように顕わとなるのか[という]なら、「そうであるなら(自より生じるなら)それらの生起が無意味となる」[という語句]から「有意味であるから」、そして「そうであるなら(自より生じるなら)それらの生起が無窮となる」[という語句]から「有窮であるから」というあり方によってである。以上のごとくであるなら、「自より生じることがない」と仏護自身が初めに述べたその主張命題の能証として、「生起が無意味・無窮である」と実際にことば通りに述べていること、単にそれのみを、証相として立てるのではなくて、実際にことば通りに述べていないが、[仏護注にある]「なるから(’gyur ba’i phyir)」という語句の能力により間接的に投げかけられているのが顕わとなる反転させた意味“生起の有意味性・有窮性”を証相として立てるのが仏護自身の主張であるのは明らかである、と。[これが清弁による仏護批判の]意味である²⁰⁾。

〔所証の反転のさせ方〕ここで[ツォンカパの]『大注釈・正理の大海（中論注）』に、

〔仏護注に〕実際に述べられている証相を反転させなければならないの

18) Cabezón[1992:294]：“the proposition to be proven would also have to be established, [making the syllogism useless]”を参考にして語を補った。

19) この“証相の反転のさせ方”は、ツォンカパ『中論注』(rTsa ũk, S52,20-53,3, T31b1-2)を承けている。Cf.第I節注8。

20) この段落に述べられている仏護注蔵訳“’gyur ba’i phyir(なるから)”をめぐるケーデップの清弁解釈の特徴については、すでに第I節[1]で解説した。

なら実際に述べられている主張命題も反転させなければならない。等しいゆえに²¹⁾。

と説かれているのは、「その2つ(証相の反転と主張命題の反転)は理由が等しい」と示しているのではない。なぜなら[仏護注に実際に述べられている]“生起の無意味性・無窮性一般”を[“自よりの不生”を論証するための]証相として立てたときの過失の生じ方と、“自よりの不生”を所証とみなしたときの過失の生じ方が等しい或いは等しいのかと疑う余地のみさえもないから²²⁾、そして、「実際に述べられている主張命題の反転させた意味が主張命題であるという不合理なことになる。実際に述べられている証相の反転させた意味が証相であるから」と、[必然的關係が無いにもかかわらず]強引に押し付けているのでもないからである²³⁾。

21) *rTsa t̥k*, S53,3-4, T31b2. Cf. 第I節[1]. ここで(仏護注に)実際に述べられている証相とは「生起が無意味・無窮となるから」、そして実際に述べられている主張命題とは「諸事物は、自より生じることがない」である。

なお、ケードップはこのツォンカパ『中論注』の一節を引用した後に、ツォンカパが一言するだけの「等しいゆえに (*mtshungs pa'i phyir ro*)」について比較的詳しく解説する。その解説は、後代のゲルク派論師に継承される。セラ・ジェツンパは『中観概論 (*rJe btsun dBu spyi don*)』においてこう述べている。*rJe btsun dBu spyi don*, S¹ 95a4-5, S² 223,14-19: 'o na/ dngos zin gyi rtags bzlog dgos na/ dngos zin gyi dam bca' bzlog dgos te/ mtshungs pa'i phyir rol/ zhes gsungs na/ de gnyis mtshungs tshul gang yin zhe na/ 'di'i don sTong 'thun sKal bzang mig 'byed las bshad pa de legs par bshad pa nyid du kho bo kho nas mthong bas sTong 'thun chen mo'i lugs bzhin du bshad par bya'o// ; 和訳: 「しからば[ツォンカパ『中論注』に]「……等しいゆえに」と説くのであれば、その2つが等しいあり方とは何かというと、この意味は、『千葉・賢劫開眼(TTChen)』に説明されていること、それが正しい説明であると、わたしだけは見るので、『千葉大論』の流儀の通りに説明することにしよう。」 Cf. Wangchen[2001:193].

22) テキスト TTChen, H171b2-3: *mtshungs pa'am mtshungs par dogs pa'i gnas tsam yang med pa'i phyir dang/* 下線部は HKST 各版わずかず異なるが、クンブム版 K182a3 の読みを採った。Cf. ツルティム/藤仲[2003:313,n.16]. なお、「等しい或いは等しいのかと疑う余地のみさえもない」というのは、「“生起の無意味性・無窮性一般 (*skye ba don med dang thug med tsam*)”を証相として立てたときの過失の生じ方と、“自よりの不生”を所証とみなしたときの過失の生じ方の2つが等しくないのは明白で疑問の余地がない」の意味。Cf. Cabezón[1992:294] ; ツルティム/藤仲訳[2003:148].

23) この一節についてはセラ・ジェツンパの説明が参考になる。*rJe btsun dBu spyi don*, S¹ 95b1-2, S² 224,6-10: 'grel ngag 'di'i dngos zin gyi bsgrub bya'i bzlog don bsgrub bya yang dag yin par thal/ 'di'i dngos zin gyi rtags kyi bzlog don rtags yang dag yin pa'i phyir/ zhes khyab 'brel med bzhin du nan gyis 'phul ba yang ma yin te/ skabs 'dir de ltar 'phen pa la 'brel khyad par can yod pa'i phyir/ ; 和訳: 「[仏護の] この注釈文の実際に述べられている所

しからばその〔ツォンカパ『中論注』の〕お言葉の意味は何なのかというと、およそ帰謬と証相（定言的論証の証相）なるものすべてについて一般的にそのように（「証相を反転させるなら主張命題も反転させなければならない」と）論じているのではなくて、「ここで仏護が“自より生じることがない”と論証するための証相として“生起の有意味性・有窮性”を立てるなら“自よりの生起の排除のみの絶対否定”を反転させた反対の意味を所証として承認しなければならないのも等しい」、ということである。

それを承認しなければならないのが等しいあり方とは、「“他より生じる”と立てなければならないのが等しい」という意味ではなくて、「“自よりの生起の排除のみの絶対否定”を所証とするのを反転させた意味である“相対否定”が所証となる。なぜなら“生起の有意味性・有窮性”を証相として立てたなら、“諸事物は、自より生じることがない”という主張命題の語句によって、所証法“諸事物は、他より生じる”を、間接的に投げかけるから」という意味である。

それも、「“諸事物は、生起が有意味・有窮である”と直接述べられたことにより、“諸事物は生じる”と述べられている；“自より生じることがない”ということにより、“自よりの生起”が否定されている；生起を所依（主題）とし〔それは〕“自よりの生起”“他よりの生起”の2つに確定するゆえ、“諸事物は、生じるが、自より生じない”と述べられたことそれ自体により、“他より生じる”と投げかけるからである；“デーヴァダッタは太っている、そして昼に食べない”と述べたことから間接的に、“夜に食べる”と投げかけるように」と、〔清弁は〕考えている。つまり清弁自身も言説として“他よりの生起”を認めるゆえ、「〔生起は〕その2つに確定する」と

証（つまり“自よりの不生”）の反転させた意味が正しい所証であることになる。この（注釈文）の実際に述べられている証相の反転させた意味（“生起の有意味性・有窮性”）が正しい証相であるから」という具合に、必然的關係が無いにもかかわらず、強引に押し付けているのでもない。この文脈（“自よりの生起”を否定する文脈）では、そのように投げかけることに特殊な関係があるからだ。」つまり、破線部にあるように、セラ・ジェツンパによると、一般に、証相を反転させたもの（証相の否定）を正しい証相とすることと、所証を反転させたもの（所証の否定）を正しい所証とすることの間には、必然的關係がない；よってツォンカパ『中論注』の所引の一節は、そのような（エセ）必然的關係を意図したものではない、と。又セラ・ジェツンパの上の説明では、“自よりの生起”の否定の場合、証相の反転と所証の反転の間に特殊な関係（'brel khyad par can）があるとするが、その特殊な関係が次に説明される。

論じるのである²⁴⁾。

〔ツォンカパの〕『大注釈(中論注)』に、

それ(主張命題)については、証相を反転させたのと同じようにすべくもないから、“自よりの生起の排除のみではない”が反転させた意味である²⁵⁾。

24) ゲルク派によると、清弁などの中観自立派の論師は言説として“他よりの生起”を認めるとする。ケーデップは後に《2.2 清弁説の解説：定説との矛盾》(TTChen, H173a2ff.)において観誓注の解釈をめぐるそのことを論じている。

しかしこの文脈の「“他よりの生起”の承認」をめぐるケーデップ流の説明の仕方に対してパンチェン・ソナムタクバは批判的である。彼は『中観概論 (*Paṇ dBu spyi don*)』においてこう述べている。*Paṇ dBu spyi don*, 46a6-b3: yang kha cig/ *Shes rab sgron ma*’i ’grel tshig gi don ’chad pa na/ *dngos po rnams bdag las skye ba med de/ zhes sogs kyis skye ba don bcas thug bcas dngos po rnams bdag skye ma yin par sgrub pa*’i rtags yang dag tu bstan na/ *dngos po rnams gzhan las skye bar ’phangs pa khas blangs dgos te/ dngos po rnams skye zhing bdag las mi skye zhes dam bcas pa*’i shugs las grub pa’i phyir te/ *skye ba la bdag skye dang gzhan skye gang rung du kha tshon chod pas so// zhes zer/ phal cher sTong thun gyi gsung las ’byung bas ’gog mi rigs mod/ Shes rab sgron ma las/ dngos po rnams gzhan las skye bar ’gyur ba dang/ zhes gsungs pa*’i gzhan dang/ *gzhan las skye zhes pa*’i gzhan gnyis gcig tu bzung na ni nor ba yin te/ *snga ma bdag skye rnam par bcad tsam las gzhan pa la bshad byung zhing/ phyi ma de dang mi ’dra bar shes sla ba*’i phyir/ ; 和訳：「又ある人は『般若灯論』の注釈文の意味を説明するときに、こう言う―「諸事物は自より生じることがない」等によって“生起の有意義性・有窮性”が“諸事物は自より生じるのではない”と論証する正しい証相として示されているのなら、“諸事物は他より生じる”と投げかけられていると承認しなければならない。なぜなら、諸事物は生じるのであり、“自より生じない”と主張したことから間接的に〔“他よりの生起”が〕成立するからである。“生起”には“自よりの生起”と“他よりの生起”の何れかであると確定するからである、と。〔このある人の説明は〕大部分が『千葉 (TTChen)』のお言葉に出ているから否定するのは正しくないのだが、しかしながら『般若灯論』に「諸事物は他より生じることになる」と言われている“他 (gzhan)”と、“他よりの生起”と言うときの“他 (gzhan)”の2つを同一と捉えるなら、誤りである。なぜなら、前者は、「“自よりの生起”の排除のみとは他のもの(異なったもの、別のもの)」のたとえと説明することがあり、後者がそれと等しくないと理解するのは容易であるから。」 Cf. Wangchen [2001: 190-192].

又この“他よりの生起”をめぐるケーデップ説は、サキヤ派のシャーキャチョクデン (Shākya mchog ldan, 1428-1507) も引用批判するが、それは後述する。 Cf. 後注 32)。

25) *rTsa ṭik*, S53,4-5, T31b2-3. ツォンカパの言う「それ(主張命題)については、証相を反転させたのと同じようにすべくもないから (*de la rtags bzlog pa ltar byar med pas*)」というのは、セラ・ジェツンパによると、仏護注に実際に述べられている証相“生起の無意味性・無窮性”を反転させて“生起の有意義性・有窮性”を証相とするのと同じように所証“自より生じることがない”を反転させて“自より生じる”を所証とすることはできない、という意味。 Cf. *rJe btsun dBu spyi don*, S¹ 94b1, S² 222,2-3 : *dngos po rnams bdag las*

そして、

その場合に、「生起は有意味・有窮であるから、諸事物は、自よりの生起の排除のみではない」ということにより、「他より生じる」ことになる²⁶⁾。

と説かれていることの意味は、以上のように知るべきである。

さらに〔ツォンカパの〕『注釈（中論注）』に、

これ（“自よりの生起の排除のみではない”という所証）は、帰謬の帰結の属性の証相を反転させたものではない。なぜなら、〔清弁は〕「所証を反転させることにより」と説明しているから、そして〔仏護は〕「自より生じることがない」を証相とは述べていないからである²⁷⁾。

と説かれているが、これは、現代の精密に考察しないある人の分別に、

「“自より生じることがない”を反転させることにより“他より生じる”ことになる」と清弁が述べた他ならぬこのことは、「仏護によって“自より生じることがない”を証相として立てた帰謬が投げかけられたところの帰謬の帰結の属性の証相を反転させたものを〔論証の〕所証法としなければならないから、“他より生じる”が所証法となる」ということを述べているのか²⁸⁾。

skye ba ni dngos zin gyi bsgrub bya bzlog pa'i don ma yin pa'i phyir/ ; 和訳：「“諸事物は自より生じる”は、〔仏護注に〕実際に述べられている所証（“自より生じることがない”）を反転させた意味ではないから。」よって、この場合は、主張命題の所証“自よりの不生”は本来“自よりの生起の排除のみ (bdag skye rnam par bcad tsam)”であるが、それを反転させて（つまり否定して）“自よりの生起の排除のみではない (bdag skye rnam par bcad tsam min pa)” “自よりの生起の排除のみの絶対否定ではない相対否定”が所証となる、そこから“他よりの生起”が所証となると、ツォンカパは論じる。Cf. 第I節[1].

26) *rTsa t̃ik*, S53,7-9, T31b3-4. Cf. 第I節[1].

27) *rTsa t̃ik*, S53,5-7, T31b3. 第I節[1]で述べたように、ツォンカパによると、清弁のいう“反転”は帰謬の換質換位の意味ではない。この一節でツォンカパはそれを確認しているようにも見える。

28) この“現代の精密に考察しないある人 (da lta'i zhib tu mi dpyod pa kha cig)”の「仏護によって“自より生じることがない”を証相として立てた帰謬が投げかけられた (Sangs rgyas bskyangs kyis bdag las skye ba med pa rtags su bkod pa'i thal ba 'phangs pa'i)」という捉え方は、だいぶ風変わりである。その“ある人”は、仏護注の帰謬の文言の反転（換質換位）の結果得られた論証の所証法が“他より生じる”であるため、そこから遡って仏護注の元の帰謬の証相を“自より生じることがない”と考えたのか。しかし、前注 4)で

という疑念があるので、それを断じるために、「そうではない」と示す。

つまり「ツォンカパは」こう考えていらっしゃる—「“自よりの生起の排除のみ”を反転させたもの、これは、仏護によってサーンキャ派に対して投げかけられたところの帰謬の帰結の属性（帰謬の所証法）の証相を反転させたものである」とは、清弁は考えていない；なぜなら、清弁自身は「所証を反転させた意味が頭わとなるから“諸事物は他より生じる”ことになる」と論じたのであって、「証相を反転させることにより“他より生じる”ことになる」とは論じていないから、そして仏護は「自より生じることがない」を帰謬の証相とは述べていないし[証相として]立てていないからである、と。

2.2 定説との矛盾(H172b3)

【反論】 そのように、清弁は、「反転させた意味を証相と所証法としなければならない」と、過失を示したことにより、何が成立すると考えたのか。

【回答】 「そこで清弁は」「自己の定説と矛盾するという過失が起こるだろう」と述べたのである。

【反論】 どのような自己の定説と矛盾する過失が起こるのか。

【回答】 「清弁は」「“生起の有意味性・有窮性”を承認することにより“[生起の] 無意味性・無窮性”を論じる学説と矛盾し、“他よりの生起”を承認することにより“他よりの不生”という定説と矛盾する」と述べているのでは決してない。なぜなら聖者（ナーガールジュナ）と仏護のだれも“生起の無意味性・無窮性”をお認めにならないから、そのような[主張]は定説のなかに存在しないからである。

【反論】 しかれば、どうなのか。

【回答】 直前に説明したあり方により、「諸事物は、生起が有意味で、自より生じない」と論じたことから間接的に“他よりの生起”が投げかけられたとき、“事物の自よりの生起の排除のみなる絶対否定”が所証となっているのではなくて、肯定的な属性を間接的に投げかける相対否定が所証となっているから²⁹⁾、「絶対否定が所証である」という自己の定説と矛盾するだろ

も述べたように、そもそも仏護注にあるままの文言は形式的に正しい帰謬ではない。“自よりの不生”を帰謬の証相とみなす独特な捉え方は、その点の誤解に起因するものか。

29) テキスト TTChen, H172b6 : “sgrub chos shugs la 'phen pa'i ma yin dgag bsgrub byar song bas” 下線部は、HST 版：“bsgrub chos”ではなく、クンブム版 K183a5：“sgrub chos

うと、このように[清弁は]考えているのである。「絶対否定が所証である」というのは、仏護だけの定説ではなくて、聖者（ナーガールジュナ）の密意を注解する帰謬派と自立派の大車轍すべての徹底した定説である。それゆえ[ツォンカパの]『注釈（中論注）』に、

そうであるなら（“自よりの生起の排除のみではない”ことから“他より生じる”となるなら）、「“自よりではない”という[『中論』1.1の語句]の意味は“自よりの生起の排除のみ”である」という定説と矛盾する³⁰⁾。

と説かれたのである。

〔観誓注をめぐって〕〔ある人が〕『般若灯論・釈疏（観誓注）』により、

〔仏護説は〕論師（ナーガールジュナ）の聖教において“他よりの生起”と“生起の有意味性・有窮性”をお認めにならない定説と矛盾する。

と説明するのは、全く考察の加えられていないものである³¹⁾。なぜなら[それは]、清弁自身が「“諸事物は他より生じる”というのが聖者（ナーガールジュナ）の密意である」と承認する[そうした]主張のみさえも理解できていない人の話にみえるからである³²⁾。

〔反論〕〔観誓注では〕「“勝義的に他より生じる”ことをお認めになら

（肯定的な属性）”を採った。Cabezón[1992:296]: “the predicate [of the reductio]”、ツルティム/藤仲[2003:150]: 「立証されるべき法」、両訳は共に H: “*bsgrub chos*” による。

30) *rTsa t̥ik*, S53,9-10, T31b4. “自よりではない(*bdag las min*)”は『中論』1.1のこと。

31) 観誓注の引用をめぐる問題は、すでに第I節[2]で解説した。

32) ここの「清弁は“他よりの生起”を（世俗的立場において）認める」というケードゥップ説は、ゲルク派の極成説。ここの文脈のケードゥップ説は、シャーキャチョクデンが引用している。Cf. *dBu ma rnam nges*, (Kha)29b6-30a1: *de la lugs de'i rjes su 'jug pa dag na re/* 〈1〉 *gzhan skye khas blangs na grub pa'i mtha' dang 'gal zhes pa Legs ldan 'byed kyi dgongs pa ma yin te/ slob dpon des dngos po rnams gzhan las skye ba 'phags pa'i dgongs par 'chad pa'i phyir zer ba dang/* 〈2〉 *spyir skye ba la bdag skye dang gzhan skye gnyis su kha tshon chod par slob dpon des 'dod pa yin no zhes zer ro//* ; 和訳: 「そこで、その流儀（ツォンカパの流儀）に随順する人々（ケードゥップ）は、こう言う— 〈1〉「“他よりの生起”を承認したなら定説と矛盾するというのは、清弁の密意ではない。なぜなら、その論師は、“諸事物は他より生じる”というのが聖者（ナーガールジュナ）の密意であると説明するのだから」と言い、そして 〈2〉「一般に生起を“自よりの生起”と“他よりの生起”の2つに確定すると、その論師（清弁）は認める」と言う。」上のうち〈1〉は、ここの TTChen, H173a3-4 を、そして 〈2〉は、上述の《2.1 清弁説の解説: 証相と所証の反転のさせ方》の一節 (TTChen, H172a1-3) を引用したものだろう。Cf. 前注 24).

ない[ナーガールジュナの]定説と矛盾する」と論じているのだ³³⁾。

【回答】しからば[観誓注をそのように解釈する対論者は]「“自より生じることがない”を反転させて“勝義的に他より生じる”が所証となる」と言わなければならないから[観誓注は]全く無関係なことを論じていることになるが、[しかし実際には]そこ(観誓注)ではそのように論じているのではなくて、「“自より生じることがない”を反転させた意味である“他より生じる”を論証する」となるのだ。それゆえ[対論者が清弁の意図を解説して]「[仏護説は]“勝義的に他より生じる”ことをお認めにならない[ナーガールジュナの]定説と矛盾することになろう」と言うならば、[対論者は]清弁を否定したことになるだろう。なぜなら、彼(清弁)は「“他より生じる”ことはあるが“勝義的に他より生じる”ことはない」と認めるからである³⁴⁾。

同じように、[観誓注にある]「[ナーガールジュナの聖教において]“生起の有意味性”をお認めにならない」ということも、「“生起の有意味性”を全くお認めにならない」なのか、又は「“勝義的な生起の有意味性”をお認めにならない」なのか、その孰れを[対論者が]考えていたかを検討することにより、[対論者説が]妥当でないことを知るのは容易である³⁵⁾。

33) テキスト TTChen,H173a4 : 'on te don dam par gzhan las skye ba mi bzhed pa'i grub mtha' dang 'gal bar smra ba yin no zhe na/ 下線部の動詞“smra ba”の主語は、観誓注と思われる。Cf.Cabezón[1992:296]。つまり、ここは、観誓注に従って清弁説を解説する対論者“ある人”に対してケードップが「“他よりの生起”を認める清弁説を理解できていない」と批判するのを受けて、対論者“ある人”が「観誓注では単なる“他よりの生起”ではなくて“勝義的な他よりの生起”を問題にしている」と反論しているものとみておく。

34) ケードップの「清弁を否定したことになる」とする論理は分かりにくい。この点に関して Cabezón [1992:499,n.933] に解説があるが、しかしそれは TTChen 本文の翻訳を何ら越えるものではない。ケードップがここに示す理由から判断するなら、ここでケードップは次のように論じているものと思われる—“勝義的に他より生じる”というのは、清弁自身も含めて如何なる中観論師も認めるものではない；清弁は「仏護注の所証を反転させるなら仏護は“他より生じる”を認めることになる」とは批判するが、しかしながら清弁は「仏護は如何なる中観論師も認めない“勝義的に他より生じる”を認めるべきだ」と、そのような無茶な批判をするはずはない；よって対論者“ある人”が「清弁は、仏護は“勝義的に他より生じる”を認めるべしと批判した」と言うなら、それは清弁の真意を捉えていないし、むしろそのように言う対論者は清弁を否定し誹謗することにもなるのだ、と。この解釈は、第I節[3]に示した別の問題をめぐるパンチェン・ソナムタクパの解説を参考にしたものである。

35) テキスト TTChen,H173a6-b1 : de bzhin du skye ba don bcas mi bzhed pa'ang skye ba

3 月称説の解説(H173b1)

3.1 自立論証の不承認

〔反論〕「〔仏護注において〕“生起の無意味性・無窮性”を、〔それを実際に〕言葉で述べているという点では、証相として立ててはいても、その意図しているところでは、反転させた2つの意味(“生起の有意義性・有窮性”)を証相として立てているのは明らかである」と、清弁が主張するのであれば、〔清弁は仏護に対して〕「証因を述べていない」という過失を、いかにして示すことになるのか。

〔回答〕それ(清弁の指摘する過失)は、「〔仏護は〕“自より生じることがない”と論証することのできる自立論証の証相を述べていない」とことと認められるゆえ、過失はない³⁶⁾。

それ(清弁による仏護への論難)に対して吉祥なる月称が回答をどのように行なったかは、『明句論』の意味を理解しやすく要約して示すなら、こうである—“自より生じることがない”と論証する自立論証の証相に関して他者によって述べられた過失を取り除いていないという過失はない；なぜなら、一般に中観派が自立論証の証相を承認するのは不合理であり、ここでも“自より生じることがない”と論証する自立論証の証相を立てているのではないからである³⁷⁾。

don bcas gtan mi bzhed pa'am don dam par skye ba don bcas mi bzhed pa gang la bsams pa brtags pas mi 'thad par shes sla'o// まず蔵文下線部“mi bzhed pa'ang”の読みに関して、Cabezón[1992:296-297]と、ツルティム/藤仲[2003:151]の両訳は、両訳が底本として使用したラサ版 H173a6: “mi bzhed pa dang” に依っているが、それは、K184a2/T122a1: “pa'ang” に訂正した方がよいだろう。又蔵文破線部の動詞“bsams pa”の主語がはっきりしないが、この一節は、観誓注にある“他よりの生起”を“勝義的な他よりの生起”と解釈する対論者説を批判する文脈にあることから、動詞“bsams pa”の主語も、その議論の対論者とみて、こう理解することが可能かと思われる。すなわち、同じその対論者は、“他よりの生起”のケースと同じように、観誓注にある“生起の有意義性”を“勝義的な生起の有意義性”と考えている(bsams pa)；それを検討みきわめることにより(brtags pas)、対論者説—「清弁は、仏護説は“勝義的な生起の有意義性”を認めない中観派の定説と矛盾する、と批判する」—は、妥当でない(mi 'thad pa)と容易に知ることができる；なぜなら、“勝義的な他よりの生起”のケースと同じように、清弁は、如何なる中観論師も認めない“勝義的な生起の有意義性”を仏護に押し付けるような無茶な批判を行うはずはないから、と。

36) Cf. *rTsa t̥ik*, S53, 12-14, T31b5-6.

37) Cf. *rTsa t̥ik*, S53, 18-19, T32a1-2; PSP, (Tib) D6a2-b1, P6b3-7a3; PSP, (Skt) pp. 16, 2-18, 4: na ca Mādhyamikasya svataḥ svatantram anumānam kartum yuktam tasmāt parokta-

なお〔中観派が〕自立論証を承認するのが不合理である理由は、すでに説明した³⁸⁾。

3.2 他者に極成の推理(H173b4)³⁹⁾

〔反論〕 そうだとしても、他者に極成している、過失を離れた証因と喩例などを述べなければならないが、〔仏護は〕それを述べていないから、前述の過失に陥るだろう。

〔回答〕 推理を述べなくても、“矛盾を述べる帰謬のみ”によって、対論者（後論者）は自己の主張において承認していることの矛盾の過失を見て、その主張を捨てることになるし、一方そのように〔過失を〕見ても〔主張を〕捨てないなら、推理を示してもその価値がない。〔われわれは〕狂人とは議論しない⁴⁰⁾。

それゆえ、対論者すべてに対して“他者に極成の推理”を必ず述べるという必然性はないが、ある人に対しては述べなければならないとしても〔実際にそれは〕述べられているのである。すなわち、仏護が〔仏護注後半で〕「自己の自体として現に存在するものには、再び生じることに必要性はない」と述べていらっしゃるのは、〔同注前半の〕「それらの」等の詳しい説明（広説）の文であるから、“現に存在する”が証相で、そして“諸事物は、再び生じるのが無意味である”が所証である。上の如くであるなら、

〔宗〕 原因時にも現前に顕わでないかたちで現に存在すると認められる事物である陶器の壺—主題—は、再び生じるのが無意味である。

〔因〕 自己の自体として既に成立して現に存在するから。

〔喩〕 たとえば現前に顕わなものとして認められる壺のように⁴¹⁾。

doṣ[ā]prasaṅgād eva tatparihāra ācārya-Buddhapālita [na] varṇanīyaḥ//; 丹治[1988:13-14] ; 前注 5)。

38) Cf. 前注 6)。

39) 《3.2 他者に極成の推理》(TTChen, H173b4-174a6) の論述内容は、ツォンカパ『中論注』の記述 (*rTsa tīk*, S53, 15-54, 11, T31b6-32a5) にほぼ従っている。

40) Cf. PSP, (Tib)D5b7-6a1, P6b1-3 ; (Skt) p.15, 8-10 : kiṃ [*tanmātreṇa* *] codite paro nābhyupaiti yato hetuḍṛṣṭāntopādānasāphalyaṃ syāt/ atha svābhyupagamavirodhacodanayāpi paro na nivartate/ tadāpi nirlajjatayā hetuḍṛṣṭāntābhyāṃ api naiva nivarteta/ na conmattakena saḥāsmākaṃ vivāda iti// ; 丹治訳[1988:12]. * 丹治[1988:131, n.126]: “iyad iti” か。

41) ツォンカパは他者極成の推理を論証式の形に整理していないが、ケードップの示す

という〔この推理〕こそが、〔月称が〕仏護の大きな意味をもつ文を、〔その〕能力（潜在的な意味）を発現させて、詳説するとき〔顕わとなる〕、〔仏護によって〕略説された通りの“他者に極成の推理”の立て方である⁴²⁾。

三支作法の論証式は、ツォンカパ『中論注』の以下の記述をふまえて構成したものだろう。
rTsa tik, S54,4-10, T32a3-5 : Sangs rgyas bskyangs kyi rang gi bdag nyid du yod pa la ni yang skye ba dgos pa med ces gsungs pa ni de dag gi zhes sogs kyi 'grel pa'i ngag yin pas yod pa rtags dang yang skye ba don med pa bsgrub bya'o// des ni rtags chos gnyis ldan gyi mthun dpe gzhan la grags pa yang bzung bas dpe rtags ma brjod ces ci ste brjod/ mngon gsal gyi bum pa slar yang gsal bar mi 'dod pa dpe yin la nus pa'i ngo bo mi gsal ba skye ba bkag pa bsgrub bya yin pas/ rtags grub pa la sgrub pa dang 'gal bar dogs pa yang med do// ; 和訳：「仏護が〔仏護注後半に〕「自己の自体として現に存在するものに再び生じる必要性はない」と述べていらっしゃるのは、〔同注前半の〕「それらの」等の解説文であるから、“現に存在する”が証相で、“再生起が無意味である”が所証である。それによって証相と所証法の2つを具えた他者に極成の同類喩も把握されるから、「喩例と証相を述べていない」と、どうして〔清弁は〕言うのか。“現前に顕わとなっていて再び顕わとなるとは認められない壺”が喩例であり、“能力を本質とする顕わになっていないものの生起の否定”が所証であるから、証相は“既に成立していることを論証する”とか“矛盾〔因〕”であるという疑惑はない。」 Cf.Samten/Garfield[2006:63-64] ; 前注 11).

ツォンカパ／ケードゥップは無論、『明句論』の以下の一節に示される五支作法の推理を参考にしただろう。尤も月称自身はそこで形式的に精確な五支作法を示そうとしたのではないのだろうが（丹治[1988:16-17]は論証式の形に翻訳していない）、今は便宜上、五支作法の形に和訳しておく。PSP,(Tib)D7a4-7, P7b8-8a3;(Skt)p.21,1-6:evam ihāpi/〔宗〕na svata utpadyante bhāvāḥ〔因〕svātmanā vidyamānānām punarutpādavaiyarthiāt/〔喩〕iha svātmanā vidyamānam puro 'vasthitam ghaṭādikam punarutpādānapekṣam dṛṣṭam/〔合〕tathā ca mṛtipiṇḍādyavasthāyām api yadi svātmanā vidyamānam ghaṭādikam iti manyase〔結〕tadāpi tasya svātmanā vidyamānasya nāsty utpāda iti/ evaṃ svātmanā vidyamānatvenopanayābhivyaktena punarutpādapratiṣedhavyabhicāriṇā hetunā svata eva Sāṃkhyasyānumānavirodhodbhāvanam anuṣṭhitam eveti// ; 和訳：「同じように、この場合でも、

〔宗〕諸事物は、自より生じない。

〔因〕自己の自体として現に存在するものにとって、再び生じるのが無意味であるから。

〔喩〕この世において、現前に存在し〔顕わとなっている〕、自己の自体として現に存在する壺等は、再び生じることを必要としないと経験される。

〔合〕同様に、粘土の塊等の状態においても、壺等は自己の自体として現に存在すると、もしあなた（サーンキヤ派）が考えるなら、

〔結〕そのときも、その自己の自体として現に存在するものに、生じることはない。

このように〔合〕によって明瞭にされている、“再生起の否定”に逸脱することのない“自己の自体として現に存在する”という証因によって、サーンキヤ派に対して、自ら、推理による矛盾を、〔仏護は〕述べているに他ならない。」 Cf.dBu ma rnam nges,(Kha)18b1-2. ちなみに丹治[1988:146,n.163]が『明句論』の所説に基づいて独自に構成した三支作法の論証式と、ケードゥップの示す三支作法の他者極成の推理はよく似ている。

42) テキスト TTChen,H174a3-4 : ~zhes pa nyid Sangs rgyas bskyangs kyi ngag don chen

それゆえ、対論者なる他者に極成の証相と所証法の2つを具えた同類喩を述べていないという過失はない。なぜなら、「現前に顕わな壺は再び生じる必要がない」と、サーンキャ派自身によって成立しているからである。「現前に顕わにはなっていないと認められる事物は再び生じる必要がある」とサーンキャ派が主張する方へ向けて、「同じものが再び生じることはない」と論証するのだから、既に成立していることを論証するという過失もない。よって〔清弁によって〕述べられたような過失から解放されている⁴³⁾。

3.3 帰謬を反転させた意味は中観派に結び付かない(H174a6)

「帰謬を反転させた意味を承認しなければならないから自己の定説と矛盾する」という過失が存在しないあり方は、その意味こそが『明句論』所説の極難解の意味として出ているものなので、暗闇の中で知性の案内人を欠いた人々は〔それを理解することができずに〕各自の気質を鮮明に宣言する〔ごとき〕もの凄い騒ぎ声を続けざまに叫んだのである。

その点に関して、清弁が仏護に対してこの文脈において論駁を多様に行うときの所依は、こうである―〔『中論』1.1の〕「自よりでなく他よりでなく」等の4句の意味を説明する際に、仏護は「諸事物は自より生じることがない」等の自説の4主張命題を提示してから、自説のこれらの主張命題を論

po can nus pa phyung nas bshad pa na ji ltar bstan pa'i gzhan la grags kyi rjes dpag 'god tshul yin la/ 破線部“kyi”“na”は、KT版による(HS:“kyis”“ni”)。又、下線部の動詞“bshad pa”“bstan pa”の主語を順次に月称、仏護とみなし、「仏護によって略説された(bstan pa/*uddiṣṭa)他者極成の推理を、月称が詳説した(bshad pa/*nirdiṣṭa)」と理解して和訳した。Cabezón[1992:297]では、明示していないが“bshad pa”の主語を月称とみていると思われる。又“ji ltar bstan pa'i”は“as is taught [by Buddhapālita]”と訳されている。拙訳はこれを参考にした。ツルティム/藤仲[2003:152;314,n.24]は、H:“Sangs rgyas bskyangs kyis”の読みをとり“bshad pa”の主語を仏護とする。

43) 以上により、清弁指摘の仏護注の2過失「証因と喩例を述べていない」「他者の述べた過失を取り除いていない」が斥けられたとする。Cf.PSP,(Tib)D7a7-b2, P8a4-7 ; (Skt) p.21,8-12 : na ca kevalam hetuḍṣāntānabhīdhanam na sambhavati/ paroktadoṣāparihāradoṣo (-āparihāro*) na sambhavati/ katham kṛtvā/ Sāṃkhyā hi naivābhivyaktarūpasya puro 'vasthitasya ghaṭasya punarabhivyaktim icchanti/ tasyaiva ceha ḍṣāntatvenopādānam siddharūpatvāt/ anabhivyaktarūpasya ca śaktirūpāpannasyotpattiḥpratiśedhaviśiṣṭasādhya tvāt (-viśiṣṭasya sādhyatvāt*) kutaḥ siddhasādhanapakṣadoṣāśaṅkā kuto vā hetor viruddhārthatāśaṅketi/ ; 丹治訳[1988:17]。*梵文斜体部“-āparihāradoṣo”“-viśiṣṭasādhya tvāt”については、丹治[1988:145,n.162;146,n.165]参照。

証するときに論証根拠（能証）である〔正因の〕三相を具えた証因を直接には立てずに、自説のその主張命題（“自よりの不生”等）の反対の立場を承認する者（“自よりの生起”を認めるサーンキヤ派等）への排撃を示す帰謬のみを、言葉で述べられたという点では、述べているが、それこそが、清弁が論争するときの所依である。それゆえ、われわれの尊者（ツォンカパ）自身も『観の大論』において、

「外的と内的な事物は何であれ、自より、どこにおいても、生じること
は、決してない」というのと、同じように他の3主張命題にも結び付け
るべきである。そのように“自よりの生起”を帰謬によって否定するの
は、そのように（“自よりの不生”等を）主張してもそれを論証する喩
例と証相を述べずに、それらの主張命題を反転させたもの（“自よりの
生起”等）への排撃を示す⁴⁴⁾。

と述べていらっしゃるように、知らなければならない。

3.3.1 清弁の考え方 (H174b6)

そこで、清弁は、こう考える—〔仏護は〕自説の主張命題を「諸事物は、
自より生じることがない」と論じてから、その論証根拠（能証）を立てる
ときに、「それらの生起が無意味となるから、そして無窮となるから」と論
じているが、これは不合理である；“〔生起の〕無意味性・無窮性”を証相
として立てるのが不合理であること等は前述した通りであるが⁴⁵⁾、自説の主
張命題が成立することと、それについて決定を生ぜしめることは、他者への
排撃を示す帰謬のみによっては不可能であるから、その主張命題を論証する
〔正因の〕三相を具えた証因を述べる必要がある；それも、〔仏護注藏訳に
ある〕「それらの生起が無意味となる」という語句によって、直接的には、
「生起が無意味であるという不合理なことになる」と、帰謬を投げかけ、そ
して「無窮となる」という〔語句〕によっても、「無窮であるという不合理
なことになる」と、帰謬が投げかけられている；他者に投げかけられた帰謬
のみによっては、「諸事物は、自より生じることがない」という自己のその

44) LRChen, C754, 1-4, T455a3-4. Cf. 長尾[1954:335-336]；ツルティム/藤仲[2003:314, n.27]. “観の大論 (lhag mthong chen mo)” とは LRChen の毘鉢舍那章のこと。

45) Cf. 《2.1 清弁説の解説：証相と所証の反転のさせ方》 TTChen, H171a2ff.

主張命題は、成立しないのであって、「[生起が] 無意味であるという不合理なことになる」を反転させた意味である「生起が有意味である」等を立てなければならないから、前述した「自己の定説と矛盾する」という過失が起こる、と⁴⁶⁾。

このように考えて[清弁は] 前述したように論駁するのであって、「正しい帰謬が論証(能証)を投げかけるのは必然的である」と考えて論駁することが、どこにあるか⁴⁷⁾。

〔清弁が仏護注に基づいて構成する帰謬〕それゆえ、清弁は仏護の主張をこう受け取ったのである—

〈B1〉〔宗〕諸事物—主題—は、生じるのが無意味という不合理なことになる。

〔因〕自より生じるから。

〈B2〉〔宗〕それ(諸事物)—主題—は、無窮に生じるという不合理なことになる。

〔因〕自より生じるから。

〔清弁は〕この2つの帰謬が〔仏護注の〕「それらの生起が無意味となる」「過度の広がりとなる」という〔語句〕によって直接的に説かれていることを述べてから、「〔仏護注において〕帰謬(帰謬の所証法)を反転させた2つの意味(“生起の有意味性・有窮性”)が“諸事物は自より生じることがない”というこの(主張命題)の論証根拠(能証)と認められているのは明らかである」と、考えたのである⁴⁸⁾。

46) この一節におけるケードップの清弁解釈の特徴については、第I節[1]で解説した。

47) ケードップは、既に《1“ある人”の清弁／月称理解とそれへの批判》(TTChen, H170 b3-4)において、「清弁のような完璧な大学者が“正しい帰謬は必ず論証を投げかける”ということを認めるはずがない」という趣旨のことを述べている。

48) ケードップはここで、実際には清弁自身は述べていないが清弁が仏護注に基づいて構成したと想定される2つの帰謬〈B1〉〈B2〉を提示する。2つの帰謬〈B1〉〈B2〉を介在させると、その反転(換質换位)により、「〔宗〕諸事物は、自より生じることがない。〔因〕生起が有意味・有窮であるから」という論証が導き出されることになる。第I節[1]参照。

なお、TTChen に示される清弁流の帰謬〈B1〉〈B2〉は、後のゲルク派論師に継承されてゆく。*rJe btsun dBu spyi don*, S¹ 93a6, S² 219, 11-12 : *myu gu chos can/ skye ba don med dang thug med yin par thal/ bdag las skyes pa'i phyir/* Cf. Tillemans [1992:318]. 又ソナムタクパは、清弁構成の2つの帰謬をこう示す。*Paṇ dBu spyi don*, 45a7: *dngos po rnam chos can// skye ba don med du thal/ rang rgyu'i dus su grub zin pa'i phyir/ zhes pa dang/ skye ba thug*

3.3.2 月称の考え方(H175b1)

以上のごとくであれば、清弁は仏護注の意味を、「[仏護注後半の]“自己の自体として現に存在する諸事物には再び生じることに必要性はない”等を[同注前半の]“それらの生起が無意味となるから”等の広説とみなした上で、[仏護注の]前後すべての言葉の能力が合わさったときに、月称が注解したような帰謬の投げかけ方が生じる」ということをお考えにならずに、上のように論難したのである⁴⁹⁾。

〔月称が仏護注に基づいて構成する帰謬〕 それに対して月称は、[仏護の]注釈の前後の語句を、略説・広説として結びつけた上で、その意味を、

〈C1〉[宗]原因時においても現前に顕わとなっていないあり方で現に存在すると認められる諸事物—主題—は、再び生じるのが無意味という不合理なことになる。

〔因〕自己の自体が既に成立して現に存在するから。

というのが第1の帰謬、そして[サーンキャ派が上を認めずに]「自己の自体として既に成立して現に存在していても再び生じる必要がある」[と言う]ならば、

〈C2〉[宗]灰白色の種子のみが後の辺際へと窮まること無く連綿と生じるという不合理なことになる。

〔因〕自己の自体として既に成立していても再び重ねて生じるから⁵⁰⁾。

med du thal/ rang rgyu'i dus su grub zin pa'i phyir/ ゲルク派(正統派)諸論師によると、清弁流の帰謬の特徴は、“生起の無意味性・無窮性”を問題にしている“再生起”を考えていない点にあるとされる。ケードゥプは、その点を、この後に論じてゆく。

49) ケードゥプによると、月称とは異なり清弁は、自不生を扱う仏護注の一節を略説・広説に二分することなく、仏護注の前半、いわゆる略説のみを取り上げて、仏護注の所説を論難したことになる。前注1)参照。

50) 第2の帰謬のテキスト TTChen, H175b4-5 : sa bon skya bo 'ba' zhig phyi mtha' thug med du brgyud nas skye bar thal/ rang gi bdag nyid du grub zin kyang slar yang bldabs nas skye ba'i phyir/ に、主題(chos can)は明記されていない。この点に関して Cabezon[1992: 300]: “Subject : the mere arising of a seed” は、藏文下線部(但し氏は“*skye ba*”を採る)を第2の帰謬〈C2〉の主題とみている。ケードゥプはこの後に、帰謬〈C1〉〈C2〉の反転させた意味(thal ba bzlog pa'i don)を“slar yang skye ba don yod pa” “sa bon skya bo 'ba' zhig phyi mtha' thug med du brgyud nas skye mi dgos pa”と述べているから、“sa bon skya bo 'ba' zhig”は、帰謬の主題ではなくて、帰謬〈C2〉の帰結の属性(thal chos)の一部をなすものかと思われるが(後注52)参照)、はっきりしない。今は藏文をそのまま和訳しておく。

というのが第2の帰謬で、その2つの帰謬を投げかけている意味と注解したのである⁵¹⁾。

すなわち[月称によると清弁流のように]「それらの生起が無意味という不合理なことになる」を反転させた意味“生起の有意義性”と、「無窮という不合理なことになる」を反転させた意味“[生起の]有窮性”を、「自より生じることがない」と論証するための証相として立てるのではなくて、「事物は自より生じることがない」と論証するために“他者に極成の証因”を立てるときに“自己の自体が既に成立して現に存在する”を立てるのだから、[清弁が批判するような]「“生起の有意義性”等を証相として立てていることを[仏護]自身が承認しなければならない」という過失はない。

直前に説明した[月称流の]この2つの帰謬(〈C1〉〈C2〉)は、[清弁流の帰謬〈B1〉〈B2〉のように]帰謬の帰結の属性を反転させたもの(“生起の有意義性・有窮性”)を「事物は自より生じることがない」ということの証相として立てて、帰謬を反転させたものを論証するために投げかけられたのではないのであって、サーンキャ派が「諸事物は原因時においても既に成立して

なお蔵文斜体部“skya bo”は、コラムパ(Go rams pa bSod nams seng ge, 1429-1489)『中観概論(*Go dBu spyi don*)』によると、(ある)種子のかたち(dbyibs)等の5属性(sa bon gyi chos lnga)のうち「いろ灰白色(kha dog skya bo)」で、それは芽の青さ(sngon po)と対比される。Cf. *Go dBu spyi don*, K118b2-119a1, S237,5-238,2. 又蔵文破線部“bldabs”は、K186a5/T123b2によった。Cabezón 訳“it must once again be planted”は、ラサ版 H: bldangs の読みによったものか。

51) ツォンカパ『中論注』も、月称が仏護注に基づいて構成したと想定されるところの2つの帰謬〈1〉〈2〉を次のように示す。*rTsa ṭik*, S51,8-14, T30b2-4: de 'gog pa na skye ba don med du thal bas 'gog pa ni 〈1〉 myu gu la sogs pa rnams slar yang skye ba don med par 'gyur te rang gi bdag nyid thob zin pa'i phyir ro// skye ba ni rang gi bdag nyid thob pa'i don du yin na de thob zin nas slar yang skye na dgos pa med do// gal te rang gi bdag nyid thob zin kyang skye dgos pa mi 'gal lo zhe na thug med du thal bas 'gog pa ni/ de lta na 〈2〉 myu gu la sogs pa de nam yang slar mi skye bar mi 'gyur te/ grub zin kyang yang skye dgos pa'i phyir ro// ; 和訳: 「それ(サーンキャ派説)を否定するとき、「生起が無意味という不合理なことになる」ことにより否定する—「〈1〉[宗] 芽等は、再び生じるのが無意味となる。〔因〕自己の自体を既に得ているから。」「生じる」とは“自己の自体を得る”という意味においてであるのに、それを既に得た上で再び生じるなら[生起に]必要性はない。もし「自己の自体を既に得ていても生じる必要があるのは矛盾しない」というなら、「[生起が] 無窮という不合理なことになる」ことにより否定する—そうであるなら(自己の自体を既に得ていても生じる必要があるなら)、「〈2〉[宗] その芽等は、如何なるときでも再び生じないことにはならない。〔因〕既に成立していても再び生じる必要があるから。」 Cf. Samten/Garfield[2006:61].

いて現に存在する」とも認め、また「自己の自体から再び生じる必要がある」とも認めるのに対して、承認説の矛盾を示すために、[サーンキャ派にとって]望ましくない属性（“再生起の無意味性・無窮性”）の帰結することを投げかけるところの単なる帰謬のみである。それゆえ、帰謬（〈C1〉〈C2〉）を反転させた意味「再生起が有意味である」「灰白色の種子のみが後の辺際へと窮まること無く連綿と生じる必要はない（つまり再生起が有窮である）」は⁵²⁾、対論者であるサーンキャ派の承認説と結び付くのであって、われわれ仏護の立場には、その2つの反転させた意味が主張命題となるのを承認することはないから、「帰謬の反転させた意味を承認することを通して自己の定説と矛盾することになる」という過失は存在しない。以上が、『明句論』における、

帰謬を反転させた意味とも、対論者だけが結び付くのであって、われわれがではない。[われわれ]自身に主張は存在しないから⁵³⁾。

という所説の非難されることのない意味である⁵⁴⁾。

52) テキスト TTChen, H176a3 : *thal ba bzlog pa'i don*……*sa bon skya bo 'ba' zhig phyi mtha' thug med du brgyud nas* *skye mi dgos pa ni*/ 下線部は HKST 版すべてが“*skye dgos pa*”だが、“*bzlog pa'i don*”であるためは否定辞を入れる必要がある。よって“*skye mi dgos pa*”に訂正した。Cabezón[1992:300]は、テキスト訂正に言及しないが、“the mere arising of a seed not occurring in a continuous fashion without any end or finality.”（下線は筆者）と訳す。

53) PSP, (Tib) D7b7-8a1, P8b5-6; (Skt) p.23,3 : *prasaṅgaviparītena cārthena parasyaiva sambandho nāsmākaṃ svapratijñāyā abhāvāt*/

54) このケードップの論述は、ツォンカパ『中論注』の以下の一節を承けている。*rTsa ſtk*, S54, 11-20, T32a5-b3: *bzlog pa'i don khas blangs pa la skyon brjod pa mi 'jug pa ni thal ba bzlog pa'i don dang yang pha rol po 'brel gyi kho bo cag ni ma yin te rang la dam bca' ba med pa'i phyir ro zhes gsungs te/ 'di ni dBu ma pas 'phangs pa'i thal ba thams cad min gyi sngar 'phangs pa'i bdag skye 'gog pa'i thal ba'o// de'i thal chos ni skye ba don dang thug med du thal ba tsam min gyi slar yang skye ba don dang thug med yin la thal chos de bzlog pa'i don slar yang skye ba don dang thug bcas ni Grangs can kho na 'dod kyi rang la de'i khas len med pas de khas blangs ba'i rgyu mtshan gyis grub mtha' dang 'gal ba ga la yod/ des na gzhung 'dis dBu ma pas thal ba 'phangs pa thams cad kyi bzlog pa pha rol pos khas len gyi rang gis khas mi len pa dang spyir dam bca' med par bstan pa ma yin no//*; 和訳: 「[帰謬の]反転させた意味を承認した場合の過失の指摘は起こらないということは、[月称の『明句論』に]「帰謬を反転させた意味と、対論者[だけ]が結び付くのであって、われわれがではない。[われわれ]自身には主張が存在しないから」と説かれている。これは、中観派によって投げかけられたすべての帰謬ではなくて、上で投げかけられた“自よりの生起”を否定する帰謬、[について言っているの]である。それ（月称流の“自よりの生起”を否定する帰謬〈1〉〈2〉）の帰謬の帰結の属性は*、単に“生起が無意味・無窮という不合理なことになる”のみではなくて、“再生起が無意味・無窮である”であり、その帰謬の帰結

3.3.3 清弁流と月称流の相違：“再生起”をめぐって(H176a5)

それゆえ、清弁でさえも、仏護注の前後の語句を略説・広説として結び付けた上で、「[仏護は]“再生起は無意味である”と、[サーンキヤ派にとって]望ましくない属性の帰結する帰謬を投げかける仕方をそのようにおこなっている」とお考えにならずに⁵⁵⁾、「自説の主張命題そのものの論証根拠(能証)を立てるのが道理であるのに、[仏護はそれを]直接に立てることをしていないので、“それらの生起は無意味となるから、そして過度の拮がりとなるから”という[一節]により、直接的には、“諸事物は生じるのが

の属性を反転させた意味“再生起が有意味・有窮である”は、サーンキヤ派だけが認めるのであって、[中観派]自身にはそれを承認することはないから、それ(反転させた意味)を承認していることを理由として「定説と矛盾する」ということが、どうしてあろうか。それゆえ、[『明句論』の]この本文により、「中観派によって投げかけられたすべての帰謬の反転させた[意味]は、対論者が承認するのであって、[中観派]自身は承認しない」とか、「一般に[中観派自身に]主張は存在しない」ということが示されているのではない。」*ツォンカパの構成する月称流の帰謬〈1〉〈2〉については、前注 51)参照。Cf.Samten/Garfield[2006:64] ; *dGongs gsal*,S163,9-15(O58), T101a6-b2.

上のうち、破線部に述べられている、〈a〉「“自よりの生起”を否定する特殊な帰謬を措くなら中観派の投げかけた帰謬を反転(換質换位)させた意味と中観派が結び付くことはある」、〈b〉「一般に中観派に主張が存在しないわけではない」という考え方は、ツォンカパ中観説の特徴の一つとして注目される。Cf.Tillemans[1992:322-323]. ケードゥプはTTChenのこの文脈では述べていないが、後に《3.3.5 帰謬の目的》(TTChen,H177a3-6)において、ツォンカパ説にしたがって〈a〉の考えを示す。Cf.前注 10)、後注 65)。

55) ツォンカパは、清弁とは異なり仏護/月称が“生起”ではなくて“再生起”を問題にしていることを強調する。Tillemans[1992:319]参照。Cf.*rTsa ṭik*,S54,20-55,6, T32b3-4 : Sangs rgyas bskyangs kyis yang skye ba don med ces yang gi sgra smos la de'i don ni myu gu rgyu dus na rang gi bdag nyid thob zin pa'i 'og tu skye bar 'dod pas de med ces pa'i don no// *Tshig gsal* las kyang yang gi sgra smos la 'Jug pa las kyang skyes zin slar yang skye bar yongs su rtoṅ par 'gyur na ni/ zhes gsungs pas yod pa dang slar yang skye ba gnyis 'gal gyi yod pa dang skye ba mi 'gal lo// yod pa dang skye ba thug bcas kyang de dang 'dra'o// ; 和訳：「仏護は「再び生じることが無意味である」という具合に“再び(yang/punar)”という語を述べており、それ(再生起)の意味は“芽が原因時に既に自己の本質を獲得し終えた後に生じること”と認められるから、それは無い、という意味である。『明句論』にも“再び”という語が述べられており、『入中論』にも「既に生じ終わって再び生じると想定するならば……」(MAv,6.9a)と説かれているから、“存在する(yod pa)”と“再び生じる(slar yang skye ba)”の2つは矛盾するが、“存在する”と“生じる”は矛盾しない。“存在する”と“生起が有窮である(skye ba thug bcas)”も、それと同様である。」; Samten/Garfield[2006:64] ; *dGongs gsal*,S163,16-20(O58), T101b2-4. Cf.MAv,6.9(Skt) : jātasya janmani punaḥ parikalpyamāne naivāṅkurādaya iha prabhavaṃ labheran/ bījasya ca prabhava eva bhaved bhavāntaṃ tenaiva tasya hi katham ca bhaved vināśaḥ//

無意味という不合理なことになる、そして無窮という不合理なことになる”という具合に帰謬を投げかけ、〔間接的に〕その反転させた意味（“生起の有意義性・有窮性”）を証相として立てる」と把握した上で、過失を述べたが⁵⁶⁾、それに対して、吉祥なる月称は、回答する仕方を直前の説明のようになさったのである。

それゆえ〔ツォンカパの〕『大注釈（中論注）』に、

〔月称『明句論』の「帰謬を反転させた意味と〔われわれ中観派〕自身は結び付かない」というこの所説により、次のことが〕示されている—清弁でさえも、「〔仏護は〕“再び生じることが無意味・無窮になる”という具合に帰謬を投げかけた」とお考えにならずに、「“一般的に生じることが無意味・無窮になる”という具合に帰謬を投げかけた」と把握した上で、「〔仏護はそれを〕反転させた意味（“生起一般の有意義性・有窮性”）を認めなければならない」と論じている、と⁵⁷⁾。

と説かれたのである。しかし〔ツォンカパ『中論注』に〕「〔清弁は〕他ならぬその“再び”という語を考えることをなさらずに〔仏護に対して〕強引な排撃を述べた」ということは、僅かすらも説かれていない⁵⁸⁾。

3.3.4 異説(ギェンサンワ説)批判(H176b4)

〔反論〕そうではなくて、清弁は〔仏護に対して〕過失を示すとき、こう述べているのだ—論証（能証）を投げかけない帰謬のみによっては〔“自よりの生起”を〕否定することはできないから、帰謬によって論証を投げかけなければならない。そこで〔仏護の示した〕帰謬は、

〔宗〕芽—主題—は、再び生じるのが有意味・有窮でないという不合理なことになる。

〔因〕自より生じるから。

56) ケードップによるこの清弁説の捉え方については、第Ⅰ節〔1〕参照。

57) ここのツォンカパ『中論注』の論理については、すでに第Ⅰ節〔3〕で解説した。

58) テキスト TTChen, H176b3-4 : ~zhes gsungs pa yin gyi/ slar yang zhes pa'i tshig gnyis po de ka rang ma dgongs par nan gyis 'tshang ba'i gnod pa brjod par zur tsam yang ma gsungs so// 破線部は「強引に押し込む排撃」、か。今は文脈から判断して「強引な排撃」としておく。なお、上の拙訳に示した蔵文下線部の動詞の主語のとり方は、Cabezón〔1992:301〕、ツルティム/藤仲〔2003:155〕の両訳とはだいぶ異なる。

というもので、そしてそれ（帰謬）によって反転させた論証が投げかけられているが、それは、

〔宗〕芽—主題—は、自より生じることがない。

〔因〕再び生じるのが有意味・有窮であるから。

というものになる。よって〔これは〕論師（ナーガールジュナ）が“再生起の有意味性・有窮性”をお認めにならないことと矛盾する、と⁵⁹⁾。

〔回答〕その場合〔清弁の構成したとされる〕その帰謬の遍充（つまり「自より生じるものは、再生起するのが無意味・無窮である」という遍充）がサーンキャ派にとって承認することになる理由はないから、帰謬を投げかける者は確実な〔帰謬〕を構成する必要があるときに、〔その帰謬は遍充が〕矛盾遍充となってしまうという此の上ないエセ帰謬である⁶⁰⁾。

又それ（帰謬）によって反転させたものが投げかけられたところの論証の証相（つまり“再生起の有意味性・有窮性”）は、〈1〉証因が所依不成である、〈2〉主題所属性が認識手段によって斥けられる、そして〈3〉遍充が矛盾遍充そのものとなってしまうという〔そのような〕証相としてある⁶¹⁾。帰謬

59) ここに示される前主張がクンル・ギェルツェンサンポ（Gung ru rGyal mtshan bzang po. 以下、ギェンサンワ rGyan bzang ba と略）の清弁解釈であることと、その特徴については、すでに第Ⅰ節〔3〕で解説した。

60) ギェンサンワ想定 of “清弁が仏護注に基づいて構成した帰謬”の遍充は、「自より生じるものは、再び生じるのが無意味・無窮である」であるが、サーンキャ派からみるなら「自より生じるものは、再生起が有意味・有窮である」から、その帰謬の遍充は矛盾したものとなる。

61) ここでケードゥプは、ギェンサンワ想定 of “清弁が構成した帰謬”を反転させた論証の証相“再生起の有意味性・有窮性”について、3 過失をこう指摘するのだろう。〈1〉第 1 の「証因が所依不成（gtan tshigs gzhi ma grub）」とは、論証主題（gzhi）そのものが成立しないために証因が主題所属性を満足しない過失のことで、今の場合、論証主題“芽”が成立しないというのは、「中観派の勝義の立場から見ると“芽”は成立しない」という意味かと思われる。〈2〉第 2 の「主題所属性が認識手段によって斥けられる（phyogs chos tshad mas bsal ba）」というのは、「世俗的に論証主題“芽”が成立するとしても、論証の証相の主題所属性“芽は、再び生じるのが有意味・有窮である”が認識手段によって否定される」、よってその証相は主題所属性を満足しないと過失を指摘するのだろう。〈3〉第 3 の「遍充が矛盾遍充そのものとなってしまう（khyab pa 'gal khyab rang du song ba）」というのは、帰謬を反転させた論証において遍充は、「再生起が有意味・有窮であるものは、自より生じることがない」であるが、むしろ、「再生起が有意味・有窮であるなら自より生じる」とも言えるため、その論証の遍充は矛盾していると過失を指摘するのと思われる。

と〔定言的論証の〕論証因の過失に関して、それよりも大きな〔過失〕を何かなし得ようか。

上のごとくであるにもかかわらず、それらの過失の述べるべきものを一つも見出さないままに、「論師（ナーガールジュナ）が“再生起の有意義性・有窮性”をお認めにならない定説と矛盾する」ということのみを言わなければならないとなっている清弁のごとき大学者は、それ以上に、まことに驚くべきものである⁶²⁾。

3.3.5 帰謬の目的 (H177a3-b3)⁶³⁾

〔反論〕他者の望んでいない帰謬を投げかけたなら、帰謬の帰結の属性（帰謬の所証法）を反転させた意味を、〔帰謬を〕投げかける者は必ず承認しなければならないから、月称自身が、仏護の注釈の意味として論じたその2つの帰謬（〈C1〉〈C2〉）の、帰謬の帰結の属性を反転させた意味を承認しないのは妥当でない。

〔回答〕『明句論』に、

無自性論者が有自性論者に帰謬論証をおこなうとき、〔自らが〕帰謬を反転させた意味を有するという不合理なことに、どうしてなろうか⁶⁴⁾。

とあるのも、帰謬一般のことではなくて、“自よりの生起”を否定する2つの帰謬のことである⁶⁵⁾。その2つの〔帰謬〕によって〔対論者にとって〕望

62) これは無論、清弁その人に対する批判ではない。ここのケードップの批判は、ギェンサンワによると清弁は驚くべきほどの不合理な論難を行っていることになるという“ギェンサンワの清弁解釈への批判”と見るべきだろう。なお、第I節〔3〕に記したように、TTChenのここのギェンサンワ批判は、'Jam dBu mtha' dpyod, 234b5-235a1 に引用される。

63) 《3.3.5 帰謬の目的》(TTChen, H177a3-b2)の論述は、ツォンカパ『中論注』(rTsa tīk, S55,9-56,2, T32b6-33a4)の所説に従っている。

64) PSP, (Tib)D8a2-3, P8b7-8; (Skt)p.24,2-3. 梵文テキストは、前注5)参照。

65) ここはツォンカパ『中論注』の次の記述をそのまま承けている。rTsa tīk, S55,11-14, T32b 6-33a1 : rang bzhin med par smra bas thal ba las bzlog pas (⇒pa'i) don can du thal bar ga la 'gyur te/ zhes pa yang thal ba spyi min gyi bdag sky'e 'gog pa'i thal ba gnyis so// 前注54)でも述べたが、ここにあるような「帰謬を反転させた意味と中観派は結び付かない」というのは“自よりの生起”を否定する言わば特殊な帰謬についてである、それ以外の中観派の投げかける帰謬一般には当てはまらない」という考え方は、それが月称の真意であるかどうかは措くとして、ツォンカパ中観説の特徴のひとつで、ケードップもそれを継承する。Cf. dGongs gsal, S163,20-164,5 (O58-59), T101b4-5 : lung gnyis pa'i don ni rang bzhin med par smra ba dBu ma pas/ rang bzhin dang bcas par smra ba Grangs can la sngar bshad

ましくないことが投げかけられたときに、[帰謬を] 投げかける人には、[帰謬を] 反転させた意味を必ず承認すべき必然性はない。なぜなら、言葉によって意味を示すのは、話者を不自由にさせるのではなくて、話者の意思に従うのであり、帰謬を投げかける人も、単に“再生起の有意味性・有窮性”の否定のみを行おうと望んで投げかけたのであるから⁶⁶⁾。

【反論】 しかれば、サーンキャ派は、“単に予め存在するものが縁によって顕わとされることのみ”を“生起”の意味として示そうと望んで、「芽が生じる」と言ったのであるから、彼（サーンキャ派）が論じている芽の生起というものの意味も、単にそれだけのこととなる。

【回答】 [『明句論』に] 「[言葉に] 能力があるとき」と説かれている⁶⁷⁾。すなわちその語（“生起”という語）にその意味（“単に予め存在するものが縁によって顕わとされることのみ”という意味）を示す能力があることと、[話者のそのように] 語ろうとする意思との2つの集合が必要であるから、過失はないという意味である。（つまり今の場合“生起”という語にそのような意味を示す能力はない。）

なお、自立論証を否定する『明句論』の意味は、まさにその[問題を扱う]章段において既に説明してあるし⁶⁸⁾、その残余の僅かばかりの[問題]は理解しやすいから、ここでは説明しない。

pa'i thal ba gnyis 'phangs pa na/ rang la bzlog don 'phen pa khas len 'dod med la/ de med kyang rang dbang med par byed par yang min pas/ thal ba de gnyis las bzlog pa khas mi len zhes pa'i don no// ; 和訳：「[『明句論』「無自性論者が有自性論者に～」等の] 第2の資料の意味は、こうである—無自性論者である中観派が、有自性論者であるサーンキャ派に、前述した[“自よりの生起”を否定する] 2つの帰謬を投げかけたとき、[中観派] 自身に反転させた意味を投げかけるのを認める意思はないが、それ(そのような意思)がなくても[話者を] 不自由にさせるのでもないから、その2つの帰謬を反転させたものを承認しない、という意味である。」

66) この説明は『明句論』(PSP,(Tib)D8a3-4, P8b8-9a2;(Skt)p.24,3-6) による。Cf.前注 5).

67) Cf. PSP, (Tib)D8a3-4, P9a1 ; (Skt) p.24,4-5 : satyām śaktau vaktur vivakṣām anuvi-dhīyante/ ; 前注 5).

68) Cf.前注 6).

III TTChen 蔵文テキスト

○蔵文テキスト校訂の底本として、ラサ版 (H) を用いた。ラサ版は、New Delhi (1972) から出版されたもののほかに、ツルティム/藤仲[2001][2003]の巻末にツルティム・ケサン氏入手のテキスト (H² と略) が収録されている (このテキストがラサ版であることは、ツルティム/藤仲[2001:41-45]参照)。2本のラサ版は全同ではなく、後者 H²の方が良い読みを示すケースがあるが、ここでは 1972 年の出版以来広く用いられている New Delhi 出版本を用いることにした。

○ラサ版 H を底本とし、ほかにクンプム版 (K)、セラ版 (S)、タシルンポ版 (T) を校合した。(S は H に基づき訂正を加えて洋装本として南インドのセラ寺から出版されたもの。)

○異読は、基本的に底本を訂正する場合に他の諸版の異読を示すことにした。しかし、まず底本にみられる単なる書き損じ (e.g. bzhan⇒gzhan, den⇒don) や、例えば「底本 bzlog ; 他版 bzleg」のような他版の読みが不適切であるのが明確な場合は、繁雑になるので一々と異読を示してはいない。

○固有名詞及びそれに類する語句は太字にした。特に書名は太字イタリックとした。又仏護説などを扱う議論の中に引用言及される仏護注などの本文は適宜イタリックとした。

○以下のテキストに底本 H のフォリオ・ラインを太字で記入した。KST は、フォリオ数又はページ数のみを入れておいた。

0 : *Tshig gsal las/*

H169a

slob dpon **Sangs rgyas bskyangs** kyis kyang dngos po rnam bdag las
 (H6) skye ba med de/ de dag gi skye ba don med pa nyid du 'gyur ba'i
 phyir dang/ shin tu thal bar 'gyur ba'i phyir ro// dngos po bdag gi bdag
 nyid du yod pa rnam la ni yang skye ba la dgos pa med do// ci ste yod
 kyang skye na nam yang mi skye bar mi 'gyur ro zhes gsungs (H1) so//
 zhes **Sangs rgyas bskyangs** kyis ji ltar bshad pa bkod nas/ (K) de la **Legs**
ldan 'byed kyis sun 'byin pa'i tshul brjod pa ni/ *Tshig gsal las/*

H169b

K180a

'di la kha cig gis de ni rigs pa ma yin te/ gtan tshigs dang dpe ma brjod
 pa'i phyir dang/ gzhan gyis smras pa'i (H2) nyes pa ma bsal ba'i phyir ro//
 thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir skabs kyi don las bzlog pas¹

1 HKST pa. It should be emended to *pas*. Cf. PSP, (Tib)D5b3, P6a5.

bsgrub par bya ba dang de'i chos bzlog pa'i don mngon pas dngos po
rnams gzhan las skye bar 'gyur ba dang/ skye ba 'bras bu dang bcas pa
nyid du 'gyur ba dang/ _(H3) skye ba thug pa yod par 'gyur ba'i phyir
grub pa'i mtha' dang 'gal bar 'gyur ro zhes skyon smra ste
zhes gsungs la/ rtsod pa 'di nyid lan dang bcas pa'i don shin tu rtogs par dka'i
gnas yin pas bshad par bya'o//

S310 1 : de yang **kha cig** na re/ *skabs kyi don* _(H4) *las* _(S) *bzlog pas* zhes sogs kyi don/
thal 'gyur yang dag yin na sgrub byed 'phen dgos pas **Sangs rgyas bskyangs**
kyis brjod pa'i thal 'gyur des kyang sgrub byed 'phen dgos so// de ltar na
thal 'gyur gyi rtags bzlog pa bsgrub bya'i chos dang/ thal 'gyur _(H5) gyi bsgrub
bya'i chos bzlog pa gtan tshigs su 'gyur bas

dngos po rnams skye ba don bcas dang thug bcas yin te/ gzhan las skye
ba yin pa'i phyir/

T119b zhes pa gtan tshigs yang dag tu khas len dgos pas/ de ltar na rang gi grub pa'i
mtha' dang 'gal _(H6) bar 'gyur ro// zhes bya ba yin la/ **dpal ldan Zla bas** skyon
de nyid spong ba'i _(T) tshul ni/ **dBu ma pa** yin na rang rgyud khas len pa mi rigs
pas thal 'gyur gyis¹ 'phangs pa'i sgrub byed khas mi len la/ thal 'gyur bkod pa
K180b _(K) tsam gyis sgrub byed 'phen pa yang _(H1) ma yin te/ smra ba pos sgrub
H170a byed 'phen par 'dod nas smras pa ma yin pa'i phyir dang/ sgra rnams ni smra
ba pos brjod par 'dod pa'i don tsam ston pa yin gyi smra ba po rang dbang med
par byed pa ma yin pa'i phyir ro// des na pha rol po la _(H2) khas blangs nang 'gal
ston pa'i thal ba 'ba' zhig pa tsam yin pas skyon med do zhes lan 'debs pa yin
no zhes zer ro//

de ni shin tu mi 'thad de/ rang rgyud khas mi len kyang gtan tshigs yang
dag khas len pa la 'gal ba med par gong du rgyas par bshad zin _(H3) pa'i phyir
dang/ thal 'gyur yang dag yin na sgrub byed mi 'phen pas khyab par 'dod pa
Thal 'gyur ba'i lugs yin par smra ba yang shin tu mi rigs pa'i phyir te/ **'Jug pa'i**
rang 'grel las/

gzhan la brten nas gal te gzhan zhig 'byung bar 'gyur na ni/

'o na me lce _(H4) las kyang mun pa mthug po 'byung 'gyur zhing
ste gzhan nyid yin pa'i phyir ro// de ni mthong ba'am rigs pa yang ma

1 KT gyis, HS gyi.

- yin te/_(S) de'i phyir 'di ni yod pa ma yin no// de nyid kyi phyir S311
 rgyu dang 'bras bu gzhan nyid du
 nam yang 'thad par mi 'gyur ro//
 zhes dang/
 thams cad las kyang thams cad _(H5) skye bar 'gyur te gang gi phyir/
 zhes pa'i **rang 'grel** las kyang/
 yang ji ltar sa lu'i myu gu gzhan du gyur pa'i sa lu'i sa bon las 'byung
 ba de bzhin du bum pa dang snam bu la sogs pa rnams kyang 'gyur ba
 zhig na/¹ de ni mthong ba yang ma yin te/ de'i phyir _(H6) 'di yod pa ma
 yin no//
 zhes **rtsa bas** dngos su bstan pa'i thal 'gyur de gnyis kyis 'phangs pa'i sgrub
 byed **'grel pas** gsal bar bshad pa'i phyir _(K) ro// gzhan yang 'di 'dra ba mang du K181a
 snang yang mangs par 'gyur bas ma bris so//
Tshig gsal gyis _(H1) **Sangs rgyas bskyangs** kyi thal ngag de nyid kyi H170b
 don 'chad pa na²/ *dngos po bdag gi bdag nyid du yod pa rnams la ni zhes pa/ de*
dag gi zhes pa'i rgyas bshad du byas nas de nyid rtags su bshad cing/ yang skye
ba la dgos pa med do zhes pa/ skye ba don med pa nyid du 'gyur _(H2) zhes pa'i
 rgyas bshad dang/ *ci ste yod kyang skye na nam yang mi skye bar mi 'gyur ro*
 zhes pa/ *shin tu thal bar 'gyur* zhes pa'i rgyas bshad _(T) du byas nas de gnyis thal T120a
 chos su bshad kyi/ skye ba don med dang thug med rtags su ma bshad pas rang
 lugs la yang de dag _(H3) rtags su khas len pa ni ha cang yang rnam par ma brtags
 pa yin la/ thal 'gyur yang dag yin na bsgrub byed 'phen pas khyab par rigs pa la
 blo kha cung zad phyogs pa yan chad su'ang khas len pa'i go skabs med pas/
Legs ldan 'byed lta bu yongs su rdzogs _(H4) pa'i pañdi-ta chen po dag de ltar
 khas len pa ga la srid/
- 2 : de bas na phyogs snga ma'i don ni 'di yin te/ **Sangs rgyas bskyangs** kyis
 bshad pa'i sbyor ba des bdag skye med par sgrub pa'i rtags dang dpe gang _(S)
 yang ma brjod pas dam beas pa tsam du zad pa'i phyir dang/ _(H5) **Grangs can** S312
 gyis bdag las zhes pa'i don 'bras bu gsal ba'i bdag nyid las yin na ni grub zin
 bsgrubs pa dang/ rgyu mi gsal ba nus pa'i bdag nyid las yin na ni skye ldan

1 KT /, HS om.

2 KST 'chad pa na, H 'chad yin. Cf. H² 'chad pa na.

K181b thams cad de las skye ba kho na yin pas khyab pa 'gal bar 'gyur _(H6) ro zhes dam
 bca' la brtags nas skyon brjod pa ma bsal ba'i _(K) phyir mi 'thad la/ gzhan yang
Tshig gsal las *thal bar 'gyur ba'i tshig yin pa'i phyir* zhes bsgyur ba de nyid/
 H171a **Shes rab sgron ma** las *glags yod pa'i tshig yin pa yi yang* _(H1) *phyir te* zhes
 bsgyur la/ de'i don ni rgol ba gzhan gyi klan ka'i glags yod pa'i tshig yin pa'i
 phyir yang mi rigs so//

2.1 : glags ji ltar yod na skabs kyi don sbyor ba'i tshig zin las bzlog dgos pas
 glags _(H2) yod par 'gyur te 'di ltar/ sbyor ba'i tshig zin ltar na dngos po rnam
 bdag las skye ba med pa bsgrub bya dang/ skye ba don med dang thug med gtan
 tshigs yin na rtags phyogs chos ma grub par 'gyur zhing/ bdag las skye na don
 med dang thug med du _(H3) 'gyur ba gtan tshigs yin na yang phyogs chos grub pa
 na bsgrub bya grub par 'gyur ba'i phyir dngos zin ltar mi 'thad cing/ des na 'dir
 bzlog don gnyis rtags su **Sangs rgyas bskyangs** rang nyid kyis kyang 'dod par
 mngon no zhes **Legs ldan** gyis _(H4) **Sangs rgyas bskyangs** kyi 'dod pa blangs
 so//

bzlog don rtags su 'dod par mngon tshul ni/ 'gyur ba'i phyir zhes pa'i tshig
 snga phyi gnyis ni bzlog pa 'phen pa'i tshig tu mngon te/ ji ltar mngon na/ de lta
 na *de dag gi skye ba don med pa nyid du* _(H5) 'gyur ba las don yod pa'i phyir
 T120b dang/ de lta na de dag gi skye ba _(T) *thug pa med pa nyid du* 'gyur ba las thug
 S313 yod pa'i phyir zhes pa'i tshul gyis so// de lta na *bdag las* _(S) *skye ba med de/* zhes
Sangs rgyas bskyangs rang gis dam bca' sngar _(H6) smos pa de'i sgrub byed du
 skye ba don med pa dang thug pa med pa zhes dngos su tshig gis zin par smos
 K182a pa de tsam zhig rtags su mi 'god par/ _(K) dngos su tshig zin la ma smos
 H171b kyang 'gyur ba'i phyir zhes pa'i tshig gi nus pas shugs la _(H1) 'phangs par mngon
 pa'i bzlog don skye ba don bcas dang thug bcas rtags su 'god¹ pa **Sangs rgyas**
bskyangs rang gi 'dod par gsal lo zhes pa'i don no²//

'dir **rNam bshad chen mo Rigs pa'i rgya mtsho** las/

dngos zin gyi rtags bzlog dgos na dngos zin gyi dam _(H2) bca' yang bzlog
 dgos te mtshungs pa'i phyir ro//

zhes gsungs pa ni de gnyis rgyu mtshan mtshungs par ston pa min te/ skye ba

1 KST rtags su 'god, H rtags 'ged.

2 K no, HST to.

don med dang thug med tsam rtags su bkod pa la skyon 'byung tshul dang bdag
 skye med pa bsgrub byar¹ byas pa la skyon 'byung tshul mtshungs pa'am² _(H3)
 mtshungs par dogs³ pa'i gnas tsam yang med pa'i phyir dang/ dngos zin gyi
 dam bca'i bzlog don dam bear thal/ dngos zin gyi rtags kyi bzlog don rtags yin
 pa'i phyir/ zhes nan gyis 'phul ba'ang ma yin pa'i phyir ro//

'o na gsung de'i don gang yin snyam na/⁴ thal 'gyur _(H4) dang rtags gang
 yin thams cad la spyir de ltar smra ba ma yin gyi/ 'dir **Sangs rgyas bskyangs**
 kyis bdag skye med par bsgrub⁵ pa'i rtags su skye ba don bcas thug bcas 'god
 na bdag skye rnam par bcad tsam gyi med dgag las bzlog pa'i bzlog don bsgrub
 byar _(H5) khas len dgos par yang mtshungs zhes pa ste/ de khas len dgos par
 mtshungs tshul ni/ gzhan las skye ste/ zhes 'god dgos par mtshungs zhes⁶ pa'i
 don min gyi/ bdag skye rnam par bcad tsam gyi med dgag bsgrub byar byed pa
 las bzlog pa'i don ma _(H6) yin dgag _(K) bsgrub byar 'gyur te/ skye ba _(S) don bcas
 dang thug bcas rtags su bkod na dngos po rnams bdag las skye ba med de zhes
 pa'i dam bca'i tshig gis bsgrub chos dngos po rnams gzhan las skye ba shugs
 la 'phen pa'i phyir ro zhes bya ba'i _(H1) don te/ de yang dngos po rnams skye ba
 don bcas thug bcas su dngos su smras pas dngos po rnams skye bar smras
 shing/ bdag las skye ba med de zhes _(T) pas bdag las skye ba bkag la/ skye ba
 gzhan byas la bdag skye gzhan skye gnyis su kha _(H2) tshon chod pas/ dngos po
 rnams skye ba yin zhing bdag las mi skye zhes smras pa nyid kyis gzhan las
 skye bar 'phen pa'i phyir te/ lHas byin tshon po dang⁷ nyin par mi za bar smras
 pa'i shugs kyis mtshan mo za bar 'phen pa bzhin no snyam du bsams _(H3) pa ste/⁸
 ste/⁸ **Legs ldan 'byed** rang nyid kyang tha snyad du gzhan skye 'dod pas de
 gnyis su kha tshon chod par smra'o//

K182b
S314

H172a

T121a

rNam bshad chen mo las/

de la rtags bzlog pa ltar byar med pas bdag skye rnam par bcad tsam min
 pa bzlog pa'i don no//

1 KT med pa bsgrub byar, HS med par sgrub byar.

2 KT pa'am, HS pa'i.

3 K dogs, HT dags, S rigs.

4 KST /, H om. Cf.H² snyam na/.

5 HST bsgrub, K sgrub.

6 HS zhes, KT ces.

7 KT dang, HS om.

8 KST /, H om. Cf.H² ste/.

zhes dang/

de'i_(H4) tshe skye ba don dang thug bcas yin pa'i phyir dngos po rnam
bdag skye rnam par bcad pa tsam min no zhes pas gzhan las skye
bar 'gyur ro//

zhes gsungs pa'i don ni de ltar shes par bya'o//

yang *rNam bshad* las/

'di thal chos kyi rtags bzlog_(H5) pa min te bsgrub par bya ba bzlog pas¹
zhes bshad pa'i phyir dang bdag skye med pa rtags su ma smras pa'i
phyir ro//

K183a zhes gsungs pa ni/ **da lta'i zhib tu mi dpyod pa kha cig** gi rtog pa la bdag skye
med pa las bzlog pas gzhan las skye bar 'gyur zhes_(H6) **Legs ldan** gyis brjod
S315 pa 'di nyid **Sangs rgyas bskyangs** kyis bdag las_(K) skye ba med pa rtags su
H172b bkod pa'i thal ba 'phangs pa'i thal chos kyi rtags bzlog pa bsgrub bya'i chos su
byed dgos pas gzhan las skye ba bsgrub bya'i chos su 'gyur zhes_(S) brjod_(H1) pa
yin nam snyam du dogs pa yod pas de bcad pa'i phyir du de lta bu ma yin par
ston pa ste/ bdag skye rnam par bcad tsam las bzlog pa 'di **Sangs rgyas
bskyangs** kyis **Grangs can** la 'phangs pa'i thal chos kyi rtags bzlog par **Legs
ldan 'byed** kyis_(H2) bsams pa ma yin te/ **Legs ldan** rang nyid kyis bsgrub par
bya ba bzlog pa'i don mngon pas dngos po rnam gzhan las skye bar 'gyur zhes
smras kyi rtags bzlog pas gzhan las skye bar 'gyur zhes ma smras pa'i phyir
dang/ **Sangs rgyas bskyangs** kyis bdag skye med_(H3) pa thal 'gyur gyi rtags su
ma smras shing ma bkod pa'i phyir ro zhes bya bar dgongs so//

T121b 2.2 : de ltar **Legs ldan 'byed** kyis bzlog don rtags dang bsgrub bya'i chos su bya
dgos pa'i skyon bstan pas ci zhig 'grub par bsams she² na/ rang gi grub pa'i
mtha' dang 'gal_(H4;T) ba'i skyon 'byung bar 'gyur zhes brjod de/³ rang gi grub
mtha' gang dang 'gal ba'i skyon 'byung na/ skye ba don bcas thug bcas khas
blangs pas don med thug med du smras pa'i grub mtha' dang 'gal la gzhan skye
khas blangs pas gzhan skye med pa'i grub mtha'_(H5) dang 'gal zhes smra ba
gtan ma yin te/ **'phags pa** dang **Sangs rgyas bskyangs** sus kyang skye ba don

1 KST pas, H par. Cf.H² pas.

2 K she, HST zhe.

3 KT brjod de/, HS brjod do/.

med thug med mi bzhed pas de 'dra grub mtha' la med pa'i phyir ro//

'o na ci zhe na/ gong du bshad ma thag pa'i tshul gyis dngos po ^(K) rnam
 skye ba don bcas ^(H6) yin zhing bdag las mi skye bar smras pa'i shugs kyis
 gzhan skye 'phangs pa na dngos po bdag skye rnam par bcad tsam gyi med
 dgag bsgrub byar ma song bar sgrub¹ chos shugs la 'phen pa'i ma yin dgag
 bsgrub byar song bas med dgag bsgrub ^(H1) bya yin pa'i rang gi grub pa'i mtha'
 dang 'gal bar 'gyur ro zhes bya bar bsams pa ste/ med dgag bsgrub bya yin pa
 ni **Sangs rgyas** ^(S) **bskyangs** 'ba' zhig gi grub mtha' ma yin gyi '**phags pa**'i
 dgongs pa 'grel ba'i **Thal** ^(H2) **Rang** gi shing rta chen po mtha' dag gi gting
 tshugs pa'i grub pa'i mtha' yin no// de'i phyir **rNam bshad** las/

de lta na *bdag las min* zhes pa'i don bdag skye rnam par bcad tsam yin
 pa'i grub pa'i mtha' dang 'gal lo
 zhes gsungs so//

Shes ^(H3) **rab sgron ma'i 'grel bshad** kyis/ slob dpon gyi lung las gzhan
 skye dang skye ba don dang thug bcas mi bzhed pa'i grub pa'i mtha' dang 'gal
 lo// zhes 'chad pa ni ches ma brtags pa te/ **Legs ldan 'byed** rang nyid dngos po
 rnam gzhan las skye ba '**phags** ^(H4) **pa**'i dgongs par khas len pa'i 'dod pa tsam
 yang khong du ma chud pa'i gtam du snang ba'i phyir ro//

'on te don dam par gzhan las skye ba mi bzhed pa'i grub mtha' dang 'gal
 bar smra ba yin no zhe na/ 'o na bdag las skye ba med pa las bzlog nas don dam
 par gzhan ^(H5) las skye ba bsgrub byar 'gyur zhes zer dgos pas shin tu 'brel med
 smra bar 'gyur la/ der de ltar mi smra bar bdag skye med pa las bzlog pa'i don
 gzhan skye bsgrub par 'gyur la/ des na don dam par gzhan ^(K) skye mi bzhed
 pa'i grub pa'i mtha' dang 'gal bar ^(H6) 'gyur ro zhes zer na ni **Legs ldan 'byed**
 bkag par 'gyur te/ des gzhan skye ^(T) yod cing don dam par gzhan skye med
 par 'dod pa'i phyir ro//

de bzhin du skye ba don bcas mi bzhed pa'ang² skye ba don bcas gtan mi
 bzhed pa'am don dam par³ skye ba don bcas mi ^(H1) bzhed pa gang la bsams pa
 brtags pas mi 'thad par shes sla'o//

3/ 3.1 : skye ba don med dang thug med tshig zin la rtags su bkod kyang bsam

1 K sgrub, HST bsgrub.

2 KT pa'ang, HS pa dang.

3 KST par, H du. Cf. H² don dam par.

S317 don la bzlog don gnyis rtags su bkod par mngon pa **Legs ldan** gyis 'dod na gtan tshigs ma _(H2) brjod pa'i skyon ston par ji ltar 'gyur zhe _(S) na/ de ni bdag skye med pa bsgrub nus kyis rang rgyud kyis rtags ma brjod pa la 'dod pas skyon med do//

de la **dpal ldan Zla** bas lan ji ltar btab pa ni/ **Tshig gsal** gyi don go bde bar bsdus te bstan _(H3) na/ bdag skye med par bsgrub¹ pa'i rang rgyud kyis rtags la gzhan gyis smras pa'i nyes pa ma bsal ba'i skyon med de/ spyir **dBu ma pas** rang rgyud kyis rtags khas len par mi rigs shing/ 'dir yang bdag skye med par bsgrub² pa'i rang rgyud kyis rtags bkod pa ma _(H4) yin pa'i phyir ro// rang rgyud khas len mi rigs pa'i rgyu mtshan bshad zin to//

K184b 3.2 : de lta na yang gzhan la grags kyis gtan tshigs dang dpe la sogs pa skyon dang bral ba brjod dgos pa ma brjod pa'i phyir sngar bshad pa'i skyon du 'gyur ro zhe na/ _(H5) rjes dpag ma brjod kyang 'gal ba brjod pa'i thal 'gyur tsam gyis phyi rgol rang gi dam bca' la khas blangs nang 'gal gyi skyon _(K) mthong nas dam bca' de 'dor bar 'gyur la/ de ltar mthong yang mi 'dor na rjes dpag bstan pa'i _(H6) yang 'os ma yin zhing smyon pa dang lhan cig rtsod par mi byed do//

H174a de'i phyir phyir³ rgol thams cad la gzhan grags kyis rjes dpag nges par brjod pas ma khyab la/ 'ga' zhig la brjod dgos na yang brjod pa yin te/ **Sangs** _(H1) **rgyas bskyangs** kyis *rang gi bdag nyid du yod pa la ni yang skye ba la dgos pa med/* ces gsungs pa ni *de dag gi zhes* sogs kyis rgyas par 'chad pa'i ngag yin pas _(H2) yod pa rtags dang dngos po rnams yang skye ba don med pa bsgrub bya'o// de ltar na

rgyu dus na yang mngon par mi gsal bar yod par 'dod pa'i dngos po rdza bum chos can/⁴ slar yang skye ba don med de/ rang _(H3) gi bdag nyid du grub zin nas yod pa'i phyir/ dper na mngon par gsal bar 'dod pa'i bum pa bzhin/

T122b
S318 zhes pa nyid **Sangs rgyas** _(T) **bskyangs** kyis⁵ ngag _(S) don chen po can nus pa

1 HST bsgrub, K sgrub.

2 HST bsgrub, K sgrub.

3 HST phyir, K phyi.

4 K /, HST om.

5 KT kyis, HS kyis.

phyung nas bshad pa na¹ ji ltar bstan _(H4) pa'i gzhan la grags kyi rjes dpag 'god tshul yin la/ de'i phyir phyir² rgol gzhan la grags pa'i rtags chos gnyis ldan gyi mthun dpe ma brjod pa'i skyon med de/ mngon par gsal ba'i bum pa ni slar _(H5) yang skye mi dgos par **Grangs can** rang nyid kyis grub pa'i phyir ro// mngon par mi gsal bar 'dod pa'i dngos po slar yang skye dgos par **Grangs can** 'dod pa'i ngor de nyid slar yang skye ba med par bsgrub³ pa yin _(H6) pas grub zin bsgrub pa'i skyon yang med pas ji skad brjod pa'i skyon las grol lo//

3.3 : thal ba bzlog pa'i don khas len dgos pas rang gi grub _(K) mtha' dang 'gal ba'i skyon med pa'i tshul ni/ don 'di nyid _(H1) **Tshig gsal** las gsungs pa'i don shin tu rtogs dka' bar byung bas mun pa'i khrod du blo gros kyi dmigs bu⁴ bral ba dag gis rang rang gi ngang tshul gsal bar sgrogs pa'i ca co mi bzad pa brgyud mar bsgrags so//

K185a

H174b

de la **Legs ldan** _(H2) 'byed kyis **Sangs rgyas bskyangs** la skabs 'dir brgal zhing brtag pa rnam pa du mar byed pa'i gzhi ni 'di yin te/ *bdag las ma yin gzhan las min*// zhes sogs rkang pa bzhi'i don 'chad pa na/ **Sangs rgyas bskyangs** kyis dngos po rnams _(H3) bdag las skye ba med pa sogs rang lugs kyi dam bca' bzhi nye bar bkod nas/ rang lugs kyi dam bca' 'di⁵ dag bsgrub pa na⁶ na⁶ sgrub byed tshul gsum pa'i gtan tshigs dngos su ma bkod par rang lugs kyi dam bca' de'i bzlog phyogs khas len _(H4) pa la gnod pa ston pa'i thal 'gyur tsam zhig tshig zin la smras pa de nyid **Legs ldan** gyis rgol ba'i gzhi yin no// des na bdag cag gi rje nyid kyis kyang **lHag mthong chen mo** las/

phyi nang gi dngos po gang dag bdag las⁷ gang na yang skye _(H5) ba nam nam yang yod ma yin _(S) zhes pa dang/ de bzhin du dam bca' gzhan gsum la yang sbyar bar bya'o// de ltar bdag las skye ba thal 'gyur gyis 'gog pa ni/ de ltar dam bcas kyang de la sgrub byed kyi dpe rtags mi brjod par dam bca' de dag _(H6) las bzlog pa la gnod pa ston pa'o// zhes gsungs pa ltar shes dgos so//

S319

1 KT na, HS ni.

2 HST phyir, K phyi.

3 HST bsgrub, K bsgrubs.

4 HS dmigs bu, KT mig bu.

5 HS 'di, KT de.

6 KST na, H ni. Cf.H² bsgrub pa na.

7 S bdag las, HKT bdag la sogs pa. Cf.LRChen,C754,1-4, T455a3-4.

3.3.1 : de la **Legs ldan 'byed** kyis rang lugs kyi dam bca' *dngos po rnams bdag las* _(K) *skye ba med de/ zhes smras nas de'i sgrub byed 'god pa na de dag gi skye ba don med par* _(H1;T) *'gyur ba'i phyir dang/ thug pa med par 'gyur ba'i phyir zhes smras pa 'di mi rigs te/ don med thug med rtags su 'god mi rigs pa sogs sngar bshad pa ltar yin la/ rang lugs kyi dam bca' 'grub* _(H2) *pa dang de la nges pa bskyed pa ni gzhan la gnod pa ston pa'i thal 'gyur tsam gyis mi nus pas dam bca' de bsgrub byed tshul gsum pa'i gtan tshigs brjod dgos so// de yang de dag gi skye ba don med par 'gyur zhes pa'i tshig gis* _(H3) *dngos su skye ba don med par thal ba 'phen pa dang/ thug pa med par 'gyur zhes pas kyang thug pa med par thal ba 'phangs 'dug cing/ gzhan la 'phangs pa'i thal 'gyur tsam gyis dngos po rnams bdag las skye ba med de zhes pa'i rang gi dam* _(H4) *bca' de mi 'grub pa'i don med par thal bar 'gyur ba las bzlog pa'i don skye ba don yod pa sogs 'god dgos pa'i phyir sngar brjod pa'i rang gi grub mtha' dang 'gal ba'i skyon 'byung snyam du bsams nas sngar bshad pa ltar* _(H5) *rgol ba yin gyi/ thal 'gyur yang dag gis sgrub byed 'phen pas khyab par bsams nas rgol ba ga la yin/ des na Legs ldan 'byed kyis Sangs rgyas bskyangs kyi 'dod pa blangs pa ni/*

〈B1〉 *dngos po rnams chos can/ skye ba don* _(H6) *med par thal/ bdag las skye ba'i phyir/*

〈B2〉 *de chos* _(S) *can/ thug med du skye bar thal/ bdag las skye ba'i phyir/ zhes pa'i thal 'gyur 'di gnyis de dag gi skye ba don med par 'gyur zhes pa dang ha cang thal bar 'gyur zhes pas* _(H1) *dngos bstan la* _(K) *smras nas/ thal bar 'gyur ba las bzlog pa'i don gnyis dngos po rnams bdag las skye ba med de zhes pa de'i sgrub byed du 'dod par mngon zhes bsams pa'o//*

3.3.2 : de ltar na **Legs ldan 'byed** kyis **Sangs rgyas bskyangs** kyi _(H2) 'grel pa'i don/ *dngos po bdag gi bdag nyid du yod pa rnams la ni yang skye ba dgos pa med do//*¹ *zhes sogs de dag gi skye ba don med par 'gyur ba'i phyir dang zhes sogs kyi rgyas bshad du byas nas tshig gong 'og thams cad kyi nus pa gril ba na/ Zla bas* _(H3) *bkrul ba ltar gyi thal 'gyur 'phen tshul 'byung ba ma dgongs par de ltar brgal ba la Zla bas ni 'grel pa'i tshig gong 'og mdor bstan rgyas bshad du sbyar nas de'i don/*

1 S do//, H do/, KT de/.

- 〈C1〉 rgyu dus na yang mngon par mi gsal ba'i tshul gyis¹ yod par _(T) 'dod T123b
 pa'i dngos _(H4) po rnams chos can/ slar yang skye ba don med par thal/
 rang gi bdag nyid grub zin nas yod pa'i phyir/
 zhes pa thal 'gyur dang po dang/ ran gi bdag nyid du grub zin nas yod kyang
 slar yang skye dgos na/
- 〈C2〉 sa bon skya bo² 'ba' zhig phyi mtha' thug med du _(H5) brgyud nas
 skye bar thal/ rang gi bdag nyid du grub zin kyang slar yang bldabs³
 nas skye ba'i phyir/
- zhes pa thal 'gyur gnyis pa ste/ thal 'gyur de gnyis 'phangs pa'i don du bkral te/
 de dag gi skye ba don med par thal ba las bzlog pa'i don skye ba don _(H6) yod pa
 dang thug med par thal ba las bzlog pa'i don thug bcas bdag skye med par
 bsgrub pa'i rtags su mi 'god kyi/ dngos po bdag skye med _(K) par bsgrub pa la K186b
 gzhan grags kyi gtan tshigs 'god pa'i tshe rang gi bdag nyid _(S) grub zin nas _(H1) S321
 yod pa 'god pas skye ba don yod pa sogs rtags su bkod pa rang gis khas blang H176a
 dgos pa'i skyon med la/ bshad ma thag pa'i thal 'gyur gnyis po 'di ni thal chos
 las bzlog pa dngos po bdag las skye ba med _(H2) pa'i rtags su bkod nas thal ba
 bzlog pa bsgrub pa'i phyir 'phangs pa ma yin gyi/ **Grangs can** dngos po rnams
 rgyu'i dus na'ang grub zin nas yod par yang 'dod la/ yang rang gi bdag nyid las
 slar skye dgos par yang 'dod pa la khas blangs _(H3) nang 'gal bstan pa'i phyir du
 mi 'dod pa'i chos thal ba 'phen pa'i thal 'gyur tsam yin pas thal ba bzlog pa'i
 don slar yang skye ba don yod pa dang/ sa bon skya bo⁴ 'ba' zhig phyi mtha'
 thug med du brgyud nas skye mi dgos pa⁵ ni/ pha rol **Grangs** _(H4) **can** gyi khas
 blangs dang 'brel gyi kho bo cag **Sangs rgyas bskyangs** kyi phyogs la ni bzlog
 don de gnyis dam bcas pa'i khas len med pas thal ba'i bzlog don khas blangs
 pa'i sgo nas rang gi grub pa'i mtha' dang 'gal bar 'gyur ba'i _(H5) skyon med do
 zhes bya ba ni/ **Tshig gsal** las
 thal ba bzlog pa'i don dang yang pha rol po nyid 'brel gyi kho bo cag ni
 ma yin te rang la dam bca' ba med pa'i phyir ro//
 zhes gsungs pa'i don kha na ma tho ba med pa'o//

1 KS gyis, HT gyis/.

2 KT skya bo, HSH² skye bo. Cf. *Go dBu spyi don*, K118b2-119a1, S237,5-238,2.

3 KT bldabs, HS bldangs.

4 KT skya bo, H skye ba, SH² skye bo.

5 HKST skye dgos pa. However, a negative like *mi* should be added.

T124a
H176b
K187a

S322

3.3.3 : des na **Legs ldan 'byed** kyis ^(H6) kyang **Sangs rgyas bskyangs** kyi 'grel tshig snga phyi mdor bstan rgyas bshad du sbyar nas slar yang skye ba don med par mi 'dod pa'i chos thal ba 'phen tshul de ltar byas pa ma dgongs par rang lugs ^(T) kyid dam bca' de nyid kyid sgrub byed 'god ^(H1) rigs pa la ^(K) dngos su bkod pa mi 'dug pas *de dag gi skye ba don med par 'gyur ba'i phyir dang ha cang thal bar 'gyur ba'i phyir zhes* pas dngos su dngos po rnam skye ba don med par thal ba dang thug med par thal ba 'phangs pa de'i bzlog ^(S) don rtags ^(H2) su 'god par bzung nas skyon brjod pa la **dpal ldan Zla bas** lan gdab tshul bshad ma thag pa ltar mdzad pa yin pas/ de'i phyir **rNam bshad chen mo** las/

Legs ldan 'byed kyis kyang slar yang skye ba don dang thug med du thal ba 'phangs pa ma ^(H3) dgongs par spyir skye ba don dang thug med du thal ba 'phangs par bzung nas bzlog don khas len dgos zhes smras par bstan to¹//

zhes gsungs pa yin gyi/ slar yang zhes pa'i tshig gnyis po de ka rang ma dgongs par nan gyis 'tshang ba'i ^(H4) gnod pa brjod par zur tsam yang ma gsungs so//

3.3.4 : de lta² ma yin par **Legs ldan 'byed** kyis skyon ston pa na sgrub byed mi 'phen pa'i thal 'gyur tsam gyis 'gog mi nus pas thal 'gyur gyis sgrub byed 'phen dgos shing/ de la thal 'gyur ni

myu gu chos can/³ ^(H5) slar yang skye ba don bcas dang thug bcas min par thal/ bdag las skye ba'i phyir/

zhes pa dang/ des bzlog pa sgrub byed 'phangs pa ni

myu gu chos can/ bdag las skye ba med de/ slar yang skye ba don bcas dang thug bcas yin pa'i phyir/

K187b
H177a

zhes ^(H6) par song bas slob dpon gyis slar yang skye ba don bcas thug bcas mi bzhed pa dang 'gal zhes brjod pa yin na ni/ thal 'gyur de'i khyab pa **Grangs can** la khas len la 'gro don med pa'i phyir thal 'gyur 'phen pa ^(K) pos tshad grub byed ^(H1) dgos pa la 'gal khyab tu song ba'i thal 'gyur ltar snang bla na med pa dang/ des bzlog pa 'phangs pa'i sgrub byed kyid rtags ni gtan tshigs gzhi ma grub cing phyogs chos tshad mas bsal ba dang ^(H2) khyab pa 'gal khyab rang du

1 K to, HST no. Cf. *rTsa t'ik*, S55,7-9, T32b5-6.

2 KT lta, HS ltar.

3 KS /, HT om.

song ba'i rtags su 'dug cing/ thal 'gyur dang gtan tshigs kyi skyon la de 'dra las
che ba ci zhig bya rgyu yod/ de lta na yang skyon de dag brjod rgyu gcig kyang
mi rnyed par slob dpon slar yang skye ba don bcas _(H3) thug bcas _(S) mi bzhed S323
pa'i grub mtha' dang 'gal zhes pa tsam zhig zer dgos pa byung ba'i **Legs**
ldan 'byed lta bu'i paṇḍi-ta chen po de bas shin tu ya mtshan che'o//¹ _(T)

3.3.5 : gal te gzhan mi 'dod pa'i thal ba 'phangs na thal chos bzlog _(H4) pa'i T124b
don 'phen mkhan gyis nges par khas blang dgos pas **Zla grags** rang gis **Sangs**
rgyas bskyangs kyi² 'grel pa'i don du smras pa'i thal 'gyur gnyis po de'i thal
chos bzlog pa'i don khas mi len pa mi 'thad do zhe na/ **Tshig** _(H5) **gsal** las/

rang bzhin med par smra bas rang bzhin dang bcas par smra ba la thal ba
bsgrubs pa na thal ba las bzlog pa'i don can du thal bar ga la 'gyur te/
zhes pa yang thal ba spyi ma yin gyi bdag skye 'gog pa'i thal ba gnyis _(H6) so//
de gnyis kyis mi 'dod pa 'phangs pa na 'phen mkhan la bzlog don nges par khas
blang mi dgos te/ sgras don ston pa ni smra ba po rang dbang med par mi byed
kyi smra ba po'i brjod 'dod kyi rjes su byed la thal ba 'phen pa pos kyang slar
_(H1) yang skye ba don bcas thug bcas dgag pa tsam zhig byed 'dod nas 'phangs H177b
pa'i phyir ro//

'o na **Grangs can** gyis sngar yod rkyen gyis _(K) gsal bar byas pa tsam zhig K188a
skye ba'i don du bstan par 'dod nas myu gu skye'o zhes brjod pa'i phyir khos
_(H2) smras pa'i myu gu skye zhes pa'i don yang de tsam du 'gyur ro zhe na/ **nus**
pa yod na zhes gsungs te tshig de la don de ston pa'i nus pa yod pa dang
brjod 'dod gnyis tshogs pa dgos pas skyon med do zhes bya ba'i don yin la/
rang rgyud³ dgag pa'i _(H3) **Tshig gsal** gyi don ni de nyid kyi skabs su bshad zin
cing/ 'di'i lhag ma cung zad go sla ba'i phyir 'dir ma bshad do//

1 KS //, HT om.

2 K kyi, HST kyi/.

3 KT rang rgyud, H rang rgyu ba, S rang rgyud pa.

付記：2014 年 8 月、北海道大学文学部インド哲学研究室主催の講演会において、筆者は「近年のチベット仏典出版と研究の進展について」と題して、近年の『カダム全集 (*bka' gdams gsung 'bum*)』 Vols.90 等の出版により、従来十分なテキストの得られなかった 11～13 世紀のチベット仏教史の“空白の時代”の思想の研究が進められつつあることを解説した。当初、本誌にはその講演原稿を寄稿する予定であったが、事情により本稿を掲載させていただくことにした。筆者の申し出を快諾して下さった北海道大学の細田典明教授、本稿掲載にあたってお世話いただいた同大学の林寺正俊准教授にお礼申し上げます。

略号及び使用テキスト

Go dBu spyi don Go rams pa bSod nams seng ge : dBu ma'i de kho na nyid spyi'i ngag gis ston pa Nges don rab gsal.

K : 『サキヤ派全書集成 (*Sa skya bka' 'bum*)』 東洋文庫, 1969, Vol.12, fols.1-208a.

S : Sarnath, Central Institute of Higher Tibetan Studies : Sakya Students' Union, 2002.

dGongs gsal Tsong kha pa Blo bzang grags pa : dBu ma la 'jug pa'i rgya cher bshad pa dGongs pa rab gsal.

S : Sarnath, Central Institute of Higher Tibetan Studies : Gelugpa Students' Welfare Committee, 1973. (Sarnath 本第6章 pp.114-442 は、小川[1988:9-336]に再録。O と略。)

T(Tashi lhunpo ed.) : *The Collected Works (gsun 'bum) of rJe Tson-kha-pa Blo-bzañ-grags-pa (Reproduced from an example of the old Bkra-sis-lhun-po redaction from the library of Klu 'Khyil monastery of Ladhakh)*, Vol.23, ed.by Ngawang Gelek Demo, New Delhi, 1979.

'Jam dBu mtha' dpyod 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje : dBu ma la 'jug pa'i mtha' dpyod Lung rigs gter mdzod zab don kun gsal sKal bzang 'jug ngogs. The Collected Works of 'Jam-dbyans-bzad-pa'i-rdo-rje (Reproduced from prints from the Bkra-sis-'khyil blocks), ed. by Ngawang Gelek Demo, Vol.9, New Delhi, 1973.

rJe btsun dBu spyi don Se ra rJe btsun pa Chos kyi rgyal mtshan : dBu ma la 'jug pa'i rnam bshad dGongs pa rab gsal gyi dka' gnad gsal bar byed pa sKal bzang mgul rgyan.

S¹ (Sera ed.) : Toh No.6838.

S² (Sera ed.) : Bylakuppe, Sera Je Monastic University, 1997.

TTChen mKhas grub dGe legs dpal bzang : *Zab mo stong pa nyid kyi de kho na nyid rab tu gsal bar byed pa'i bstan bcos sKal bzang mig 'byed* (sTong thun chen mo).

H(lHa sa ed.) : *Madhyamika Text Series*, Vol.1, ed.by Lha-mkhar Yoñs-dzin bsTalpa rgyan mtshan, New Delhi, 1972, fols.1-235a.(ソルティム/藤仲 [2001][2003] 所収のラサ版は、H² と略。)

K(sKu 'bum ed.) : *mKhas grub dGe legs dpal bzang gi gsung 'bum*, Tibetan Buddhist Resource Center: w23693-0693, Vol.Kha, fols.1-247a.

S(Sera ed.) : *dBu ma'i bstan bcos chen po sTong mthun sKal bzang mig 'byed*, Bylakuppe: Sera Mahayana University, 1999.

T(Tashi lhunpo ed.) : *Collected Works of Lord mKhas-grub rje dGe-legs-dpal-bzañ-po* (Reproduced from the clear wooden block from Tashi Lhunpo Monastery preserved in Kanam Monastery in Spiti region), Vol.1, Dharamsala, 1998, fols.1-163a.

Pañ dBu spyi don Pañ chen bSod nams grags pa : *dBu ma'i spyi don Zab don gsal ba'i sgron me*. gSung 'bum, Vol.7, Mundgod.

BMTT Gung ru rGyal mtshan bzang po : *dBu ma'i stong thun*. gSung 'bum, Vol.3(先哲遺書 38), 中国蔵学出版社, 2007, pp.177-350.

dBu ma rnam nges gSer mdog Pañ chen Shākya mchog ldan : *dBu ma rnam par nges pa'i chos kyi bang mdzod Lung dang rigs pa'i rgya mtsho*. *The Complete Works* (gSuñ 'Bum) of gSer-mdog Pañ-chen Shākya-mchog-ldan, Vols.14,15, Thimphu, 1975.

rTsa ñik Tsong kha pa : *dBu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad Rigs pa'i rgya mtsho* (rTsa she ñik chen).

S:Sarnath, Central Institute of Higher Tibetan Studies : Gelugpa Students' Welfare Committee, 1992.

T(Tashi lhunpo ed.) : *The Collected Works* (gsuñ 'bum) of rJe Tson-kha-pa Blo-bzañ-grags-pa, Vol.23, New Delhi, 1975.

LRChen Tsong kha pa : *Lam rim chen mo*.

C : 『菩提道次第広論 *Byang chub lam rim che ba*』 青海民族出版社, 1992.

T(Tashi lhunpo ed.) : *The Collected Works* (gsuñ 'bum) of rJe Tson-kha-pa

Blo-bzañ-grags-pa, Vols.19,20, New Delhi, 1977.

PP Bhāviveka : *Prajñāpradīpa-mūlamadhyamakavṛtti*. (Tib)D:Toh No.3853,
P:Ota No.5253.

PPTk Avalokitavrata : *Prajñāpradīpa-ṭīkā*. (Tib)D:Toh No.3859, P:Ota No.
5259.

PSP Candrakīrti : *Mūlamadhyamakavṛtti-prasannapadā*.
(Skt)ed. by L.de la Vallée Poussin, Bibliotheca Buddhica IV.
(Tib)D:Toh No.3860, P:Ota No.5260.

BPV Buddhapālita : *Buddhapālita-mūlamadhyamakavṛtti*. (Tib)D:Toh No.
3842.

MAv/MAvBh Candrakīrti : *Madhyamakāvatāra/Madhyamakāvatāra-bhāṣya*.
MAv(Skt)ed. by Li Xuezhong : “*Madhyamakāvatāra-kārikā* Chapter 6,” *Journal
of Indian Philosophy*, Vol.43, 2015, pp.1-30.
(Tib)ed. by L.de la Vallée Poussin, Bibliotheca Buddhica IX.

Cabezón[1992] José I.Cabezón : *A Dose of Emptiness, An Annotated Trans-
lation of the sTong thun chen mo of mKhas grub dGe legs dpal bzang*, State
University of New York Press.

Samten/Garfield[2006] Geshe Ngawang Samten/Jay L.Garfield : *Ocean of
Reasoning, A Great Commentary on Nāgārjuna's Mūlamadhyamakakārikā*,
Oxford University Press.

Tillemans[1992] Tom J.F.Tillemans : “Tsong kha pa *et al.* on Bhāvaviveka-
Candrakīrti Debate,” *Tibetan Studies, Proceedings of the 5th Seminar of the
International Association for Tibetan Studies NARITA 1989*, ed. by S.Ihara &
Z.Yamaguchi, Naritasan Shinshoji, pp.315-326.

Wangchen[2001] Gelong Namgyal Wangchen : ‘*Jam mgon yab sras gsum gyi
dgongs pa rjes ’jug mkhas pa so sos ji ltar bkral tshul dbu ma’i dwogs gcod
rTen ’byung snying po* (The Essence of Dependent Arising, An analytical note on
Lama Tsongkhapa and his two chief spiritual sons’ thoughts on the Middle Way view
and how they are further interpreted by the successive scholars), Mundgod :
Drepung Loseling Library Society.

小川[1988] 小川一乗『空性思想の研究Ⅱ—ツォンカパ造『意趣善明』第
六章のテキストと和訳—』文栄堂。

- クンチョック/奥山[2014] クンチョック・シタル／奥山裕『全訳 ツォンカ
パ 中論註『正理の海』』起心書房。
- 小林[2014] 小林守「パンチェン・ソナムタクパの言及する “*sTong thun
chung ba*” について」『印仏研』63-1、pp.99-106。
- 丹治[1988] 丹治昭義『中論釈 明らかなことば I』関西大学出版部。
- ツルティム/藤仲[2001] ツルティム・ケサン／藤仲孝司『ツォンカパ 中観
哲学の研究Ⅲ—ケードゥプ・ゲルク・ペルサンボ著『深遠な空性の真実を
明らかにする論書・幸いなる者の開眼（千葉大論）』和訳と研究（上）』
文栄堂。
- 同[2003] 『同Ⅳ—和訳と研究（下）』文栄堂。
- 長尾[1954] 長尾雅人『西藏仏教研究』岩波書店。
- 西沢[2011] 西沢史仁『チベット仏教論理学の形成と展開』第1巻（東京大
学提出の学位論文）。